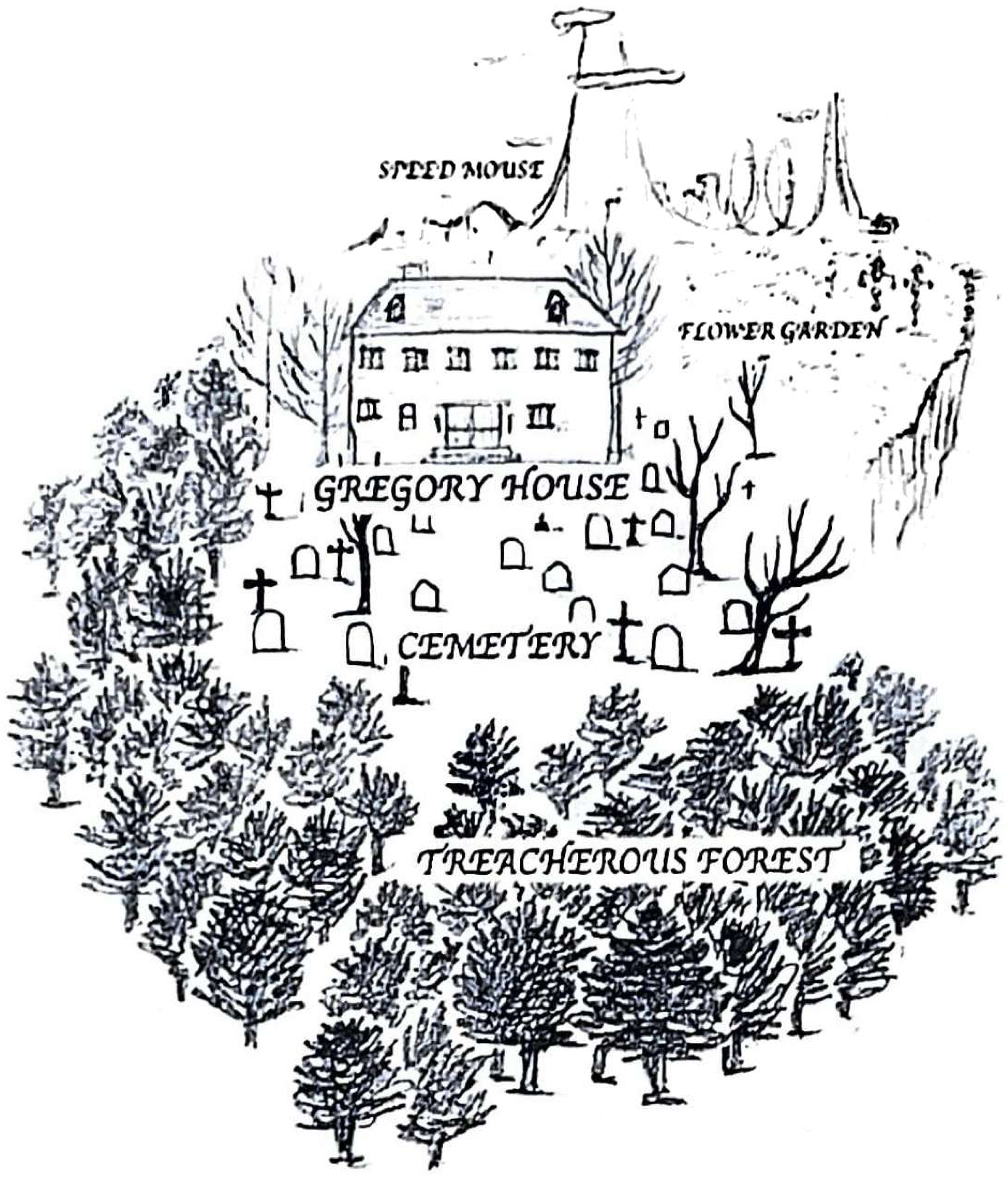
グレゴリーホラーショー ガイドブック アナザーサイド

ケイブンシャの大百科別冊

GREGORY HORROR SHOW

Guide Book ANOTHER SIDE





Gregory House

予約受付番号：0G-504G-Gre2（グレゴリーまで）

■客室料金■
Room Rate

客室タイプ Room type	定員 Capacity	基本料金 Room Rate
シングル Single	1	💀💀💀💀💀💀💀
デラックスシングル Deluxe Single	1	💀💀💀💀💀💀💀💀💀
金庫室 Vault	2	💀💀💀💀💀💀💀💀💀💀💀

※季節によって、料金が異なる場合もございます。

Gregory Horror Show Guide Book

Another Side

グレゴリーホラーショー　ガイドブック　アナザーサイド

勁文社

CONTENTS

ここに掲載したシナリオは「グレゴリーホラーショー」の1stシリーズ第一夜から第二十五夜まで、全話のシナリオである。
アフターレコーディング時における現場での判断や演出上の変更などで実際に放映されたものとは一部違うところもある。特に、第一夜に用意されていたオープニングは放映時間の関係で一切がカットされている。このため状況説明のためのナレーションが冒頭に入ることになり、それが全話で踏襲されることとなった。

GREGORY HORROR SHOW

——— 1stシリーズ シナリオ ———

オープニング

嵐の夜グレゴリーハウスの外
　稲妻に無気味に浮かび上がるグレゴリーハウスのシルエット。
　「HOTEL GREGORY HOUSE」の看板。扉が無気味に開き、カメラは建物の中へ。

グレゴリーハウス玄関
　暗闇、稲妻が無気味なインテリアを照らしている。

グレゴリー　「グレゴリーハウスへようこそ…ここは彷徨える魂の集まるホテル」
　ボウッと蝋燭の光が灯り、浮かび上がるグレゴリーハウスのシルエット。

グレゴリー　「現実からはじき出されたお客さまには、大変お喜びいただいております」
　グレゴリーは背を向け闇に向かって歩き出す。

グレゴリー　「では、よい御滞在を…」
　途中で振り返るグレゴリー。

グレゴリー　「永遠に…ヒッヒッヒ…」
　再び歩き出し暗闇に消えていく…
「GREGORY HORROR SHOW」タイトルロゴ

第一夜
なぜ僕はこの霧の立ちこめる森の中を
彷徨っているのだろう…
たしか、最終で駅に着き、
家に向かって歩いていたはずだ。



霧の漂う森
森の木々をカメラはすり抜けていく。
月明かりに無気味に浮かぶ、古びた宿屋、グレゴリーハウス。
看板をなめるようにカメラは近づいていく。
軋む音と共に扉が開き、カメラはグレゴリーハウスの中へ…
カメラと(私)の視線が同化する。

グレゴリーハウスフロント
フロントに人影はない。
フロント越しの机に置かれた蝋燭の明かりが、無気味なインテリアを照らしている。
(私)は辺りを見回す。
気配を感じ、(私)が振り向くと、老ネズミ、グレゴリーのアップ。

グレゴリー 「お泊まりですか…、これは失礼、驚かせてしまったようですね…ヒッヒッヒ…」
グレゴリーは向きを変えフロントへ歩き出す
グレゴリー 「だいぶお疲れの御様子で…えっ、疲れが顔に出てるのかって!?」
途中で立ち止まり振り返る。
グレゴリー 「いえいえ、お客さまのお顔に出ているのは疲れではございません…」
…少しの間…
グレゴリー 「お顔に出ているのは死相でございます…」
再び歩き出す。
グレゴリー 「冗談でございますよ…ヒッヒッヒ…」
グレゴリーはフロントの壁にかかっている鍵の束と、テーブルの上の蝋燭を手に歩き出す。
グレゴリー 「ただ今お部屋の御用意をいたしますので少々お待ち下さい…ヒッヒッヒッ」
暗い廊下を歩き出し闇の中へ消えていく。
ペタペタ…グレゴリーが廊下を歩いている音だけが聞こえる。
ギィ〜…バタン!
謎の叫び声 「ギャァァァ…」
ザクッザクッ。悲鳴に混じり、頭に鉈が刺さるような音が響く。
グレゴリー 「ハァハァ…お客さま…」
突然、背後から声をかけられ振り向く。グレゴリーのシャツには血痕がついている。
グレゴリー 「お部屋の御用意ができましたので御案内いたします…ヒッヒッヒ…」
背を向け歩き出したグレゴリーの後頭部には鉈が刺さっている。
グレゴリー 「ヒッヒッヒッ…」
グレゴリー、笑いながら廊下の暗がりに消えていく。

第二夜
僕がこの部屋に泊まるため、
泊まり客がひとり消えた。
ということは、つぎの泊まり客が来た時
誰が消えるのだろう…

客室の扉の前

グレゴリー　「お客さま…このお部屋をお使い下さい…」

グレゴリーは客室の鍵を開け、軋む扉を開く。

客室の中

薄汚れた室内。床に目をやると、茶色いシミがついている。振り向くとグレゴリーのアップ。

グレゴリー　「決して血痕などではございません…」

クローゼットに目をやるとグレゴリーが遮る。

グレゴリー　「お開けにならない方がよろしいかと…」

窓を開けようとすると…背後からグレゴリーの声。

グレゴリー　「お開けになるのであれば、それなりのお覚悟を…」

(私)はグレゴリーと窓を交互に見て、迷いながらも思いとどまる。

グレゴリー　「…おやめになりますか？その方が賢明かと…ヒッヒッヒッ！…御用がございましたらグレゴリーまで…」

グレゴリーはドアに向かい歩き出す。

グレゴリー　「それではよい御滞在を…」

外に出て、扉を閉める。

グレゴリー　「永遠に…ヒッヒッヒッ…」

グレゴリーの声が部屋の中に響き渡る。
(私)は部屋の中を見回している。ゴウン…ゴウン…廊下から重い金属音が…
扉を少し開け覗くと、廊下の暗がりから審判小僧がレールをつたって近づいてくる。

審判小僧　「僕の名前を知ってるか〜い♪審判小僧というんだよ〜♪」

審判小僧は自分のテーマソングを口ずさみながら、(私)の目の前を平然と行き過ぎ、
再び暗がりに消えていく。
ゴトゴト…クローゼットから物音が…
(私)がクローゼットに近づき、開けようと手を伸ばした瞬間、いきなり扉が開く。
中にはグレゴリーが！

グレゴリー　「言い忘れたことがございました…決して他のお部屋をお覗きにならないように…」

グレゴリー、クローゼットから飛び出てドアに向かい、ドアを閉めかける。

グレゴリー　「お客さま御自身のためでございます…」

ドアを閉める。

グレゴリー　「ヒッヒッヒッ…」

グレゴリーの笑い声が暗闇に響く。

第三夜
疲れていた…
とにかく眠りたかった…
隣の妙な物音など気にせずに、
眠ってしまえばよかった…



部屋の中
妙な物音が部屋に響いている。
(私)は部屋の中を見回し、隣の部屋との壁に近づく。
金属音に混じり、聞こえる猫の泣き声。次第に騒がしくなる。
バタンッ!誰かが隣の部屋に……!

グレゴリー　「うるさいぞ!静かにしろ!」

ピシッピシッ!フギャー!鞭の音と叫び声が響く。
やがて静かになりノックの音が…
ドアを開けるとグレゴリーが立っている。

グレゴリー　「聞き苦しいものをお聞かせいたしました…放っておくといつまでも騒いでおりますもので…
えっ…お隣のお客さまはどんな方かって…?…ヒッヒッヒッ…」

グレゴリー、笑い声を残し部屋を出ていく。
しばらくすると再び隣の部屋からの物音が響き出す。
(私)は恐る恐るドアを開け、グレゴリーのいないことを確かめる。

廊下
(私)は暗い廊下を隣の部屋のドアに向かい歩き始める。妙な物音がだんだん大きくなってくる。

隣の部屋の扉の前
隣の部屋の前は安宿に似つかわしくない重い鉄の扉。響く奇妙な物音。
(私)は鍵穴に視線を落とし、恐る恐る近づいていく。
鍵穴の向こうには恐ろしい目が!

ネコゾンビ　「フギャー!!」

(私)は驚いて後ろに飛び退く。背後に人の気配が。
振り向くとそこにはグレゴリーが!

グレゴリー　「ネコゾンビでございます…かつて我々を苦しめた一族の哀れな末裔でございます」

視線は鍵穴を抜けネコゾンビの部屋へ。ネコゾンビは牢屋のような部屋で鎖に繋がれている。
ぶつぶつ独り言を呟き、うろうろ部屋の中を歩き回る。

ネコゾンビ　「おなか減ったニャァ…ご飯まだかニャァ…」

ネコゾンビは猫らしい仕種で顔を擦っている。

グレゴリー　「あのお部屋に入られた頃は、それは毛並みの美しい猫でございました…それが忘れもしないあの嵐の夜…」

稲妻が廊下の窓の外に走る。じっと目を閉じるグレゴリー。

ネコゾンビ　「フギャー!!」

グレゴリーは閉じていた目をカッと見開く。

グレゴリー　「…何者かが縫い付けたのでございます…彼の目を…口を…耳を…なんとおぞましき出来事…」

グレゴリー、さっと背を向け廊下を歩き出し、途中で立ち止まる。
稲妻の光が振り返るグレゴリーの顔を照らす。

グレゴリー　「…鍵だけはちゃんとおかけになった方がよろしいかと…」

稲妻に浮かび上がるグレゴリーのアップ。

グレゴリー　「眠りから覚めると目が開かないなどということもおありかと…」

ネコゾンビ　「フンギャー!!」

ネコゾンビの叫び声に稲妻が走る。

グレゴリー　「ヒッヒッヒッ…」

闇に響くグレゴリーの笑い声。

第四夜
子供というのは物に魂を吹き込み
自分の世界を創ることがある。
僕もかつてそうだったように…



グレゴリーハウス廊下
暗い廊下の奥から幼い女の子の泣き声が聞こえる。

ロストドール　「えーん…えーん…」
暗がりの中から女の子が近づいてくる。
ロストドール　「私のお人形返して…お人形返して！」
(私)は近づいてくる女の子に恐怖を感じ後ずさりする。
グレゴリー　「おおっ…まだ見つからないのかい？お人形は…」
グレゴリーは女の子に駆け寄り抱き上げる。
グレゴリー　「そんなに怖がらないで下さい、お客さま…この子にとって人形だけが友達だったのでございます…」
女の子は涙ぐんでいる。
グレゴリー　「その人形を心ない父親が捨ててしまったのでございます」
ロストドール　「おじちゃん…」
女の子は両手を前に差し出し(私)に近づいてくる。
グレゴリー　「おおっ…おじちゃんに抱っこしてもらいたいのかい…」
ロストドール　「私の…」
グレゴリー　「その日から探し続けているのでございます…」
ロストドール　「お人形…」
(私)は女の子に手をさしのべる。
グレゴリー　「おおっ抱き上げてやって下さい…哀れな少女を…」
(私)は力一杯女の子を抱き上げる。
ロストドール　「お人形…返して～!!」
その瞬間、奇声と共に女の子は歯をむき出し、恐ろしい顔に。
ロストドール　「シャアアァァ～!!!」
その豹変に驚いた(私)は、とっさに女の子を床に放り投げる。
人形のように床に転がる女の子。
ロストドール　「ケケケケ…」
糸でつられるように起き上がり、まるで宙に浮いているように、すぅっと廊下の暗闇に消えていく。
グレゴリー　「なんと哀れな…」
ロストドール　「ケケケケ…」
笑いながら女の子はだんだん小さくなっていく。
グレゴリー　「気づいていないのですよ…」
(私)はグレゴリーに背を向ける。
グレゴリー　「自分が人形だということを…ヒッヒッヒッ…お気をつけ下さい…知らぬ間に誰かに操られていることもおありかと…」
グレゴリーは笑いながら、すぅっと廊下の闇に消えていく。
グレゴリーの頭上には操り糸が…

第五夜
目の前に置かれたひと皿のスープ。
決して飲んではいけないスープだった。
それは容易に想像できたはずなのに…



客室の中
テーブルの上に置かれたスープ皿を蝋燭の明かりが無気味に照らしている。

グレゴリー　「お夜食にどうかと思いまして…」
粘着質のその液体はボコッボコッと泡を立てている。

グレゴリー　「えっ、食べる気がしないと！？」
グレゴリーは慌てた様子で辺りをきょろきょろ見回す。

グレゴリー　「シッ！お客さま！…そんな言葉がもしシェフの耳に入ったら…」
スープ皿を手に取りドアに向かうグレゴリー。途中足を止め、ゆっくり振り返りながら話し出す。

グレゴリー　「1週間前、同じような事を申していたお客さまがおりました。金の差し歯が印象的なお方でした…」

廊下
廊下の暗がりを歩いてくる人影。ギシッ。床の軋む音。

グレゴリー　「その言葉をシェフが扉の外で聞いていたのでございます…」
廊下側から扉に無気味な影が落ちる。

グレゴリー　「その夜を境に、お客さまはお姿を消してしまわれました…」
ゴボリッ。泡の立つスープのアップからグレゴリーの顔へ。

グレゴリー　「もちろん偶然でございます…ヒッヒッヒッ…」
グレゴリーの肩越しにドアが少し開き、隙間から料理長が覗いている。
キラリ！手に持った大きな肉切り包丁が無気味に光る。

グレゴリー　「おおっ！お食べになりたいと！」
（私）はグレゴリーの手からスープ皿を奪い取り、慌てて食べ始める。グレゴリーは揉み手をして喜んでいる。

グレゴリー　「お味の方はいかがでございましょう。いいダシが出ているはずでございます」
ガリッ…（私）は噛んでしまった硬い異物を床に吐き出す。コロンッ…金色の差し歯が床に転がり落ちる。

グレゴリー　「なにせ1週間たっぷり煮込んでありますがゆえ…ヒッヒッヒッ…」
グレゴリーの顔のアップ。そしてグルグルその顔が回り出す。ガシャン！床に落ちるスープ皿。

グレゴリー　「おや？どうなさいまいたか…ヒッヒッヒッ…」
歪んだ視界の中、地獄のシェフが大きな肉切り包丁を振り上げ近寄ってくる。

地獄のシェフ　「料理は…ダシが…い〜の〜ち〜…」
鈍い光を放つ肉切り包丁が勢いよく降り下ろされる！

グレゴリー　「おやめなさい！」
ガッ！！地獄のシェフの肉切り包丁は（私）を逸れ、床に勢いよく突き刺さる。

地獄のシェフ　「なぜ〜止める〜…」

グレゴリー　「下味をゆっくりしみ込ませなければいけません…」
視界は次第に暗くなっていく。

グレゴリー　「恐怖という下味を…ゆっくりと…ヒッヒッヒッ…」
真っ暗な視界の中、グレゴリーの笑い声が無気味に響く。

第六夜
体が痺れて動かない…
あのスープのせいだ。
動かぬ体と、定まらぬ視界が
僕の恐怖を増幅していく。



客室の中

(私)はベッドから起き上がることができない。次第に視界が明るくなっていく。
部屋の中にピンクの人影。しかし、まだ焦点は定まらずぼやけている。

キャサリン　「気がついたようね。あなたラッキーよ！看護婦の私がこのホテルに泊まっていて！」

次第に視界はハッキリとなる。
ピンクのトカゲがベッドに近づき、チロチロ青い舌を出しながら(私)を覗き込む。

キャサリン　「あのスープを飲んで生きているなんて、あなた相当タフね～信じらんないわ！」

床に置いてある巨大な注射器をおもむろに持ち上げる。

キャサリン　「さあ、採血しましょ！」

巨大な注射器の針が鈍く光る。

キャサリン　「ねぇ、見える？この注射器！」

チロチロと青い舌で注射器を舐めながら、恍惚の表情をするキャサリン。

キャサリン　「この鈍く光る針をあなたの浮き上がった静脈に今から突き刺すの！」

チロチロと太い針に青い舌をからめ、おもむろに頭上に持ち上げ突き刺す。
ズブッ。静脈に針が突き刺さる音。

キャサリン　「そして、私はあなたの血液を思いっきり吸い上げるの！」

注射器の中に血液がドクドクと流れ込んでいく。

キャサリン　「あ～…たまんないわぁ～この感覚…」

白目をむいて恍惚の表情を見せているキャサリンにグレゴリーが呼びかける。

グレゴリー　「…キャサリン…キャサリン！！」

我に返り(私)を覗き込むキャサリンとグレゴリー。

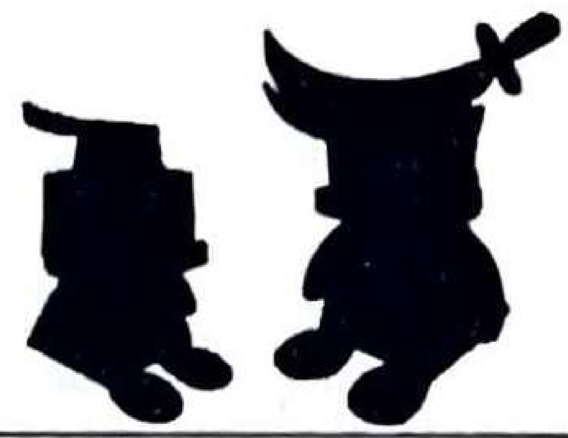
グレゴリー　「やりすぎですよ、キャサリン。お客さまが干からびているじゃありませんか…ヒッヒッヒッ…」
キャサリン　「あらいやだ！白目むいてるわ～この人…」

なみなみと血液の入った注射器を嬉しそうに抱きかかえ、チロチロと青い舌で舐めまわすキャサリン。

キャサリン　「久し振りだわ～人間の血なんて…」
グレゴリー　「お客さまは生かさず、殺さず、じわじわとですよ、キャサリン…ヒッヒッヒッ…」

(私)の意識は薄らいでいく。グレゴリーの笑い声が響く。

第七夜
あれだけ血を抜かれて
まだ生きているとは。
しかし、もう一度採血されたら
僕は生きていられるだろうか…



客室の中

(私)はゆっくり意識を取り戻す。横たわる(私)をミイラぼうやが心配そうに覗き込んでいる。

ミイラぼうや　「おっちゃん、なんで寝てんの? 病気? 僕も頭がズキズキするんだ、風邪ひいたのかなぁ?」

ミイラぼうやの包帯の巻かれた頭から、ひとすじの血が流れ落ちる。

ミイラぼうや　「お父ちゃんもいつも頭が痛いって言ってるよ。遺伝なのかな、体が弱いのって?」

ミイラぼうや、わざとらしく床に倒れ込む。

ミイラぼうや　「ああ…僕もう辛くて立ってられないや。僕の方が絶対重い病気だね」

再びミイラぼうや、ぴょこんと立ち上がる。

ミイラぼうや　「そうだ! 僕お父ちゃん呼んでこよう!」

元気よくドアを開けて出ていくミイラぼうや。廊下でミイラぼうやのミイラ父ちゃんを呼ぶ声。

ミイラぼうや　「おと～ちゃ～ん! この部屋に病気のおっちゃんがいるよ～!」

しばらくして、ミイラぼうやがミイラ父ちゃんを連れてやってくる。

ミイラぼうや　「おっちゃん、お父ちゃん連れてきたよ」

ミイラ父ちゃん　「やあ、息子から聞きましたよ、ご病気だそうで。大変ですなぁ…私も病気がちでいつも頭痛に悩まされているんですよ。はっはっはっ」

ミイラ父ちゃんの頭からひとすじの血が流れる。
ノックの音が響く。

ミイラ父ちゃん　「やあ、来たようですな。実は知り合いの看護婦さんを呼んでおいたんですよ」

静かにドアが開き、太い注射器の針がキラリと光る。チロチロと青い舌を出したキャサリンが現れる。

ミイラぼうや　「あっ、キャサリンおばちゃん!」

キャサリンに駆け寄るミイラぼうや。

キャサリン　「あなた、ラッキーよ! 2度も私に診てもらえるなんて!」

廊下

グレゴリーが頭に氷のうを乗せている。

グレゴリー　「ゴホゴホ、やはり健康が一番でございます…ヒッヒッヒッ…」

グレゴリー廊下の闇に消えていく。

第八夜
突然、選択を強いられた時、
人は冷静な判断ができるだろうか…
そして、その選択は
真実なのだろうか…



客室の中

聞き覚えのある歌声が廊下から聞こえてくる。(私)は恐る恐る扉を開け廊下に出る。

廊下

審判小僧　「♪僕の名前を知ってるか～い♪審判小僧というんだよ～♪」

廊下の暗がりから審判小僧が近づいてくる。

審判小僧　「ジャッジメ～ント！」

奇声をあげて目の前で止まる審判小僧。

審判小僧　「君はエリート商社マン。今日は人生を左右する大事な契約の日。なんと愛する彼女が事故に！病院へ行けば契約はパーだ。さぁ、君ならどうする？」

選択を迫る審判小僧。

審判小僧　「なるほど、君は彼女のところへ行くというんだね？それでは真実の天秤に聞いてみよう！金と愛情秤にかけりゃ～♪君の心もゆらゆらチ～ン♪」

審判小僧の真実の天秤が揺れる。

審判小僧　「ジャッジメ～ント！はい、カックン！」

天秤のハートが地面に落ちる。

審判小僧　「君は契約に行きました。彼女は病院のベッドで息を引き取りました。これが真実！はい、おしまい！」

審判小僧は何事もなかったかのように、歌を口ずさみながら去っていく。

審判小僧　「♪僕の名前を知ってるか～い♪審判小僧というんだよ～♪」

唖然と見送る(私)の後ろにグレゴリーが。

グレゴリー　「なんと、愛する彼女を見捨てるとは…お客さまはひどいお方でございます…」

ため息をついて暗がりに歩き出すグレゴリー。

グレゴリー　「いえいえ、お気になさる事はございません。誰しも御自分がかわいいものですから…」

グレゴリーは途中で振り返る。

グレゴリー　「真実とは残酷なものでございます…ヒッヒッヒッ…」

グレゴリーは笑い声と共に暗がりへ消えていく。

第九夜
いどまれた決闘に理由が
見つからないとしたら…
僕は生きるために
引き金を引けるのだろうか…



客室の中

風の音と共に西部劇風のBGMが聞こえてくる。いきなりドアが蹴り破られる。

カクタスガンマン「ヘイ、アミーゴ！久し振りだな！えっ、お前は誰だって！？へんっ！相変わらずとぼけた野郎だ！」

カクタスガンマンが銃を抜き構える。

カクタスガンマン「勝負だ！銃を取れ！」

カクタスガンマンは銃を(私)に投げる。通りかかったグレゴリーが部屋の中を覗き込む。

グレゴリー「おおっ！決闘でございますか！お若い方は元気がおありでうらやましい！」

グレゴリーは部屋の中に入ってくる。

グレゴリー「この決闘、私が見届けさせていただきます。カモン！ミュージック！！」

その言葉と同時に西部劇風のBGMが流れ、部屋の中はサボテンが立ち並ぶ西部の荒野に変わる。

グレゴリー「この金貨が落ちた時が合図でございます…」

そう言ってグレゴリーは金貨を西部の空高く弾く。

グレゴリー「えっ！決闘の理由が分からないって！？」

空高く弾かれたコインは放物線の頂点を迎えようとしている。
今にも銃を抜こうと身構えるカクタスガンマン。

グレゴリー「見つからぬ理由を探して命を落とすか、生き残るために銃を抜くか、お客さま御決断を！」

コインが地面に落ちる。カクタスガンマンが素早く銃を抜く。
バーン！銃声が西部の青空にこだまする。
…カクタスガンマンの銃口に残る白煙。転がる枯れ草。
グレゴリーの額からひとすじの血が流れ、グレゴリーはゆっくり倒れ込む。
驚くカクタスガンマン。西部の風景は消え、元の部屋の風景に戻る。
後ずさりして部屋から逃げ出すカクタスガンマン。
起き上がったグレゴリーは散弾銃を手に、カクタスガンマンを追いかける。
廊下で銃声が！(私)は慌てて後を追う。廊下には仁王立ちのグレゴリーが。

グレゴリー「戦いに理由などございません。生き残った方が正義なのでございます。ヒッヒッヒッ…」

グレゴリーは散弾銃を撃ちながら廊下の暗がりに消えていく。

第十夜
非日常が日常と化し、
現実の記憶が薄らいでいく。
家族の顔も思い出せない自分に
恐怖を覚える。



廊下

テレビフィッシュが廊下の暗がりからゆっくり泳いでくる。
頭のモニターにはカラーバーと顔が交互に映っている。

客室

愛する息子　「…パパ…パパ…」

(私)が驚いて扉に近づくと、扉をすり抜けて入ってきたテレビフィッシュが、部屋の中をゆっくり泳ぎ回る。

愛する息子　「パパ、僕ね…今日ね…」

愛する妻　「お帰りなさい…お食事にする、それともお風呂？」

荒れた画面に家族らしき映像が流れている。久し振りに耳にする懐かしい声。
テレビフィッシュは再び扉をすり抜け廊下に出ていく。
(私)は慌てて扉を開け、テレビフィッシュの後を追いかける。
廊下の暗がりに消えていくテレビフィッシュを必死で追いかける(私)。
くるりと向きを変えたテレビフィッシュの画面に息子らしき人影が映っている。

愛する息子　「パパ…僕だよ…忘れちゃったの？…パパ…僕を思い出して…パパ！」

その時、突然画面が消える。

グレゴリー　「お試し放送はここまででございます…」

振り向くとグレゴリーがテレビのリモコンを手に立っている。

グレゴリー　「続きをお望みでしたらグレゴリーケーブルテレビに御契約を…」

グレゴリーは背を向けて廊下の暗がりに歩き出す。

グレゴリー　「えっ。なぜ画像がぼやけてるかって！？あの画像はお客さまの記憶でございますから…ヒッヒッヒッ…」

グレゴリーは廊下の暗がりへ消えていく。

廊下の曲がり角

テレビフィッシュが曲がり角から現れる。画面にはグレゴリーが映っている。

グレゴリー　「あやふやな記憶よりグレゴリーホラーショーをお勧めします。好評放送中でございます… ヒッヒッヒッ …」

テレビフィッシュが廊下の暗がりに消えていく。グレゴリーの笑い声が響く。

第十一夜
ポケットの中に携帯電話が
入っているのに気づいた。
なんとか家族と連絡が取りたい。
自分が消え去る前に…



客室の中

(私)は携帯電話の数字を押し始める。プルルル～…呼び出し音が響く。
突然ネコゾンビが現れ、携帯電話を取り上げバリバリとかじり始める。

グレゴリー　「申し訳ございませんお客さま…ちょっと目を離した隙に逃げ出してしまいまして…ヒッヒッヒッ…」

ネコゾンビ　「おなか減ったニャァ…もっと食べたいニャァ…」

グレゴリーはネコゾンビの腕を取り部屋から出ていく。床にはかじりかけの携帯電話が転がっている。
(私)は部屋を飛び出し公衆電話を探して回る。フロントに公衆電話が。
受話器を取ってコインを入れるが、公衆電話はペッと吐き出してしまう。

公衆電話　「小銭での御使用はできません。高額紙幣をお入れ下さい」

(私)はしぶしぶ、しわくちゃの紙幣を入れる。

公衆電話　「一応もらっておきますが、こんなしわだらけの紙幣では御使用になれません」

(私)は怒りを抑えつつも新しい紙幣を入れなおす。

公衆電話　「まあ、いいでしょう。さっさと番号を押して下さい」

(私)が番号を押すと呼び出し音が。

公衆電話　「24時間テレフォンショッピング。今週は最強のシェイプアップマシーンの登場です。
その名はパワーグレゴリー！無重力感覚でみるみる脂肪が…」

(私)が怒って電話を置くとグレゴリーが。

グレゴリー　「御連絡はちょっと御無理かと…お客さまがお金をお入れになっているのは、当ホテルにお泊まりのお客さまでございます…」

公衆電話は台から飛び下り廊下の暗がりへ逃げていく。

公衆電話　「儲かっちゃった！儲かっちゃった！一杯飲みに行こっと！」

グレゴリー　「当ホテルは電話の設置はしておりません…ヒッヒッ…ヒーッ！！」

グレゴリーのシッポをネコゾンビがかじっている。

グレゴリー　「お、お前というやつは…待ちなさい！！」

ネコゾンビ　「おなか減ったニャァ…なんか食べたいニャァ…」

グレゴリーはネコゾンビを追いかけて暗がりに消えていく。

第十二夜
このホテルが異常なのか、
それとも僕がおかしいのか…
今ではそれすらも
どうでもよくなってきていた。

廊下

(私)が廊下を歩いていると、どこからともなく聞き覚えのある歌が聞こえてくる。
(私)が辺りを見回すと、歌声は近くの部屋から聞こえてくる。(私)が扉を開けると…

審判小僧　「ジャッジメ～ント！！」

奇声と共に審判小僧が天井から落ちてくる。

審判小僧　「君は小学2年生。友達とふたり放課後の教室で遊んでいる。ガシャーン！！
君は花瓶を割ってしまった。その時先生が入ってきた。さぁ、君ならどうする？」

判断を迫る審判小僧。

審判小僧　「ふんふん、君は正直に謝るというのだね！それでは真実の天秤に聞いてみよう！」

審判小僧の真実の天秤が揺れる。

審判小僧　「うーっ！ジャッジメーント！！はい、カックン！」

天秤のハートが地面に落ちる。

審判小僧　「君はとっさに友達のせいにしました。その友達は君に裏切られたショックで次の日から学校に来なくなりました。これが真実！はい、おしまい！…己のために友達の人生を狂わせてしまうとは…」

いつの間にか後ろにグレゴリーが。

グレゴリー　「お客さまは悪魔のようなお方でございます…」

審判小僧がグレゴリーに視線を向ける。

審判小僧　「今度はグレゴリー、君をジャッジ！」

急に矛先を変えられて驚くグレゴリー。

審判小僧　「崖から落ちそうになっている君のママと大きなチーズ。助けるのはどっち？」

グレゴリー　「マ、ママです！もちろんママに決まってます！！」

審判小僧　「はい、カックン！」

天秤のハートが地面に落ちる。

審判小僧　「グレゴリー、君は迷いもせず大きなチーズを引き上げ、嬉しそうに食べ始めました。
その間に君のママは奈落の底に落ちていきました。これが真実！はい、おしまい！」

グレゴリーママ　「グゥ～レ～ゴ～リ～…」

グレゴリーママの声が無気味に響く。グレゴリーは両手を合わせ天井を仰ぎ、ママに懇願する。

グレゴリー　「お～ママ…誤解です！私がそんなことをするはずが…」

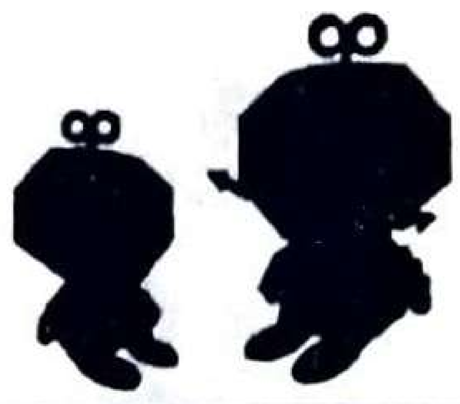
グレゴリーママ　「いいや、お前ならやりかねん…後で私の部屋へおいで…」

グレゴリー　「お～ママ！お許しを…」

審判小僧、アップで一言。

審判小僧　「君も私にジャッジされてみないか！？」

第十三夜
もしも、時を戻せるとしたら、
僕はあの夜を望むだろう…
このホテルに迷い込む前の
あの月のない夜を…



廊下

廊下に店を開いているクロックマスターの横を通り過ぎようとする(私)。

マイサン 「父ちゃん、あのおっちゃん歪んでるよ…」

クロックマスター「うむ、よく気づいたぞ、マイサン！確かに歪んでおる」

気になる言葉に引き返した(私)の顔を、しげしげと眺めるクロックマスター。

クロックマスター「おおっ見事な歪みじゃ！」

マイサン 「致命的だね、父ちゃん！」

クロックマスター「うむ、致命的じゃよ、マイサン！ 気になるじゃろう、お若いの。おぬしの時間が歪み始めておるのじゃ…」

クロックマスターはため息をつきながら首を横に振る。

マイサン 「このままでは生き地獄だね、父ちゃん」

クロックマスター「もうすでに生き地獄じゃよ、マイサン！」

ガーン…(私)はショックを受ける。

クロックマスター「お若いの、時間の歪みを直したいか…」

(私)は頷く。

クロックマスター「残念！すでに手後れじゃ！」

ガーン！(私)は再びショックを受ける。

クロックマスター「しかーし！我はクロックマスター、時の支配者！歪む前に時間を戻す事はできる！どうするね、お若いの…」

チッ！チッ！チッ！チッ！クロックマスターの顔の針が回り出す。マイサンの鼻血が上下する。

クロックマスター「そうか、時間を戻してほしいか？よし、引き受けた！マイサン、ネジを巻け！」

マイサン 「父ちゃん、まかして！」

マイサン、クロックマスターの頭に飛び乗り、ネジを巻き始める。

クロックマスター「ターイム、イズ、マネー！」

血管が切れるがごとく気合いを入れるクロックマスター。
針とスロットが勢いよく回り出すと、今までの映像が戻り始める。

クロックマスター「ホォーーーーーーーーーーッッ！！………」

ピン！！逆回転する映像がグレゴリーハウスの玄関まで来た時、クロックマスターの頭からネジが吹き飛ぶ。
倒れ込むクロックマスター。慌てて駆け寄るマイサン。

マイサン 「大丈夫、父ちゃん！！！」

クロックマスター「ハァ、ハァ、…マイサン。ワシも年じゃのう…戻しきれなんだ…」

マイサン 「父ちゃんは頑張ったよ！僕、尊敬するよ！」

グレゴリーハウスの扉が重々しく開く。

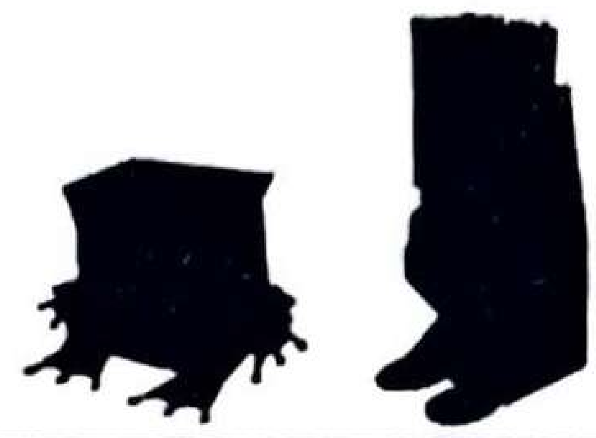
クロックマスター「…また生き地獄の始まりじゃ…」

マイサン 「気にする事はないよ、父ちゃん！どうせ生き地獄だったんだから！」

グレゴリーが廊下の暗がりから歩いてくる。

グレゴリー 「グレゴリーハウスへようこそ…おや、どこかでお会いした事がございませんか…ヒッヒッヒッ…」

第十四夜
水晶玉に浮かぶ未来に
何の意味があるのだろう…
僕には受け入れることしか
許されていないのだから…



廊下にサーカスのようなテントが張ってある。テントの周りには霧が立ちこめている。

テント内
水のイメージが浮かんでいる。カメラを引くと、水晶玉に手をかざしている占い師の姿。

カエル占い師　「水ゲロ…お前さんの未来に水が見えるゲロ…それも近い未来だゲロ…」
カエル占い師は首を横に振る。
カエル占い師　「…いつかは分からないゲロ…お前さんの運命の流れ次第だゲロ…」
(私)がテントから出て廊下を歩いていると、暗がりからトイレット小僧が近づいてくる。
トイレット小僧は横に立ち止まり、キッと(私)に顔を向ける。
トイレット小僧　「キィィィィィ～！！！」
いきなりヒステリックな奇声をあげながら、口からトイレットペーパーを引き出し始める。
トイレット小僧　「ハァ、ハァ、ハァ…」
トイレット小僧は過度な運動に疲れたようで、肩で息をしながら、レバーを引き下げる。
トイレット小僧　「キャアアァァァ……！！」
ドシャ～！！トイレの流れる水に巻き込まれていくトイレット小僧。
トイレット小僧　「たすけて～～！！」
トイレット小僧の叫び声を聞き、助けにいこうとする(私)の後ろでグレゴリーの声が。
グレゴリー　「助ける必要はございません…彼は自ら流されたのでございます…」
トイレット小僧　「たすけて～…」
トイレット小僧の悲痛な叫びに再び助けに駆け寄ろうとする(私)。
グレゴリー　「お止め下さい、お客さま…流される事が彼の運命(さだめ)なのです…」
後ろではトイレット小僧の叫び声が響いている。(私)は意を決し、助けにむかいトイレの中を覗き込む。
トイレット小僧　「た～す～け～て～！！！」
(私)が覗き込んだ瞬間、ザバアッ！！便器からトイレット小僧が飛びかかり、(私)を一緒に引きずり込んでいく。
ドシャ～…(私)はトイレット小僧と一緒に流されていく。
グレゴリー　「はぁ…感情に流され、御自分まで流されてしまうとは…だから御忠告申し上げたのに…」
カエル占い師　「…それがあの者の運命(さだめ)だゲロ…」
テントの中からカエル占い師が呟く。
カエル占い師　「グレゴリー、お前さんの未来も浮かんでいるゲロ…」
テントの中に入り、興味深そうに水晶玉を覗き込むグレゴリー。
カエル占い師　「お前さんの泣き顔が浮かんでいるゲロ…」
グレゴリー驚いた顔で笑い出す。
グレゴリー　「ワシが涙を流すだと！？ヒッヒッヒッ…！ありえんよ！お前の占いもあてにならんな…ヒッヒッヒッ…」
グレゴリー、笑いながらテントを出ていく。残されたカエル占い師、ぼそりと呟く。
カエル占い師　「…運命には逆らえないゲロ…」
立て付けの悪い廊下の板がグレゴリーの重さで跳ね上がり顔に直撃！
グレゴリー　「オウッ！」
あまりの痛さに涙を流すグレゴリー。
グレゴリー　「あたたたた…」
カエル占い師　「ほ～ら、やっぱり泣いたゲロ…」
ボ～ン！白い煙を残しカエル占い師はテントと共に消え去り、声だけが響く。
カエル占い師　「運命には逆らえないゲロ…」
グレゴリー　「癇に触るカエルだ…あたた…」
グレゴリー顔を摩りながら廊下の暗がりに消えていく。

第十五夜
僕の目の前に道は続いている。
進む事しか許されない一本道。
その先にはいったい何が
あるというのだろう…



排水溝の中
排水溝に流された(私)は、ホテルの一室の天井から流れ落ちる。

かなり広めの部屋
床にスゴロクのマスが描かれている。唖然としている(私)に慌てた様子のグレゴリーが扉を開け駆け寄る。

グレゴリー　「お客さま、やはりここに流れ着いておりましたか…この部屋には長居は無用、早く出るといたしましょう。やつに見つかる前に…」

グレゴリーが(私)を連れて部屋を出ようとした時、ファンファーレと共にスポットライトが部屋の中央に落ちる。
扉に手が届く寸前、目の前の扉が消えていく。

グレゴリー　「お～…遅かったか…」

スポットの中にはルーレット小僧が立っている。ルーレット小僧はちょこちょことふたりに近づく。

グレゴリー　「地獄のゲームの始まりでございます…お客さま、お覚悟を…」

ルーレット小僧は(私)に駆け寄り、頭のルーレットを差し出す。

ルーレット小僧　「回して♥」
グレゴリー　「この部屋を出るにはゲームをクリアするしかないのです…お回し下さい！お客さま…」
ルーレット小僧　「早く回して！！」

覚悟を決めて(私)はルーレットを弾く。勢いよく回ったルーレットは3の目で止まる。

グレゴリー　「お客さま、3コマお進み下さい…1、2…」

(私)はグレゴリーのかけ声に合わせてスゴロクのマスを進む。

グレゴリー　「3！！…」

3コマ目に足を踏み入れる(私)。緊張するグレゴリー。しかし、何も起こらない。

グレゴリー　「セーフ！！セーフでございます。お客さまはラッキーでございます」

ルーレット小僧は今度はグレゴリーに近づき頭を差し出す。

ルーレット小僧　「回して♥」

グレゴリーが回したルーレットは8の目に止まる。

グレゴリー　「おお、さい先のいい！8でございます！ 1、2、3、お客さまお先に失礼！」

グレゴリーは自分でかけ声をかけながら(私)を追い抜きマスを進んでいく。

グレゴリー　「4、5、6、7、…8！！」

グレゴリーが8のマスに足を入れた途端、ドカーン！！地雷が大爆発！！グレゴリーは黒焦げ。

ルーレット小僧　「キャハハハ！！」
グレゴリー　「ゴホ、ゴホ…さぁ、次はお客さまの番でございます！」

ルーレット小僧が(私)に近づき頭を差し出す。

ルーレット小僧　「はい、回して♥」

ルーレットの目は5。(私)はグレゴリーと同じマスに向かい歩き出す。

グレゴリー　「まさか…3たす5は…8！！ なんという迷惑なお方…」

(私)がコマを進めるにつれ、頭を抱え困惑の表情を見せるグレゴリー。

グレゴリー　「お、お客さま近寄らないで下さいませ！！」

(私)がグレゴリーのマスに止まると…ドカーン！再び地雷が爆発！またまたグレゴリーは黒焦げ。

グレゴリー　「ええい、早くゴールしなければ体がもたんわい…」

グレゴリーの出した目は6。

グレゴリー　「1、2、3、4、5～…6！！」

マスに止まったと同時にズシーン！巨大な分銅がグレゴリーを下敷きに！！

ルーレット小僧　「ペッタンコ！！キャハハハハ！」

グレゴリーハウス外観
ドカーン！！バリバリッ！ズシーン！叫び声が響き渡る。

スゴロクの部屋
グレゴリーはゴール4つ手前。(私)は1つ手前のマス。グレゴリーのルーレットの目は4。
(私)を追い抜きグレゴリーは喜び勇んでゴールに向かう。

グレゴリー　「ゴール！！ヒッ！！」

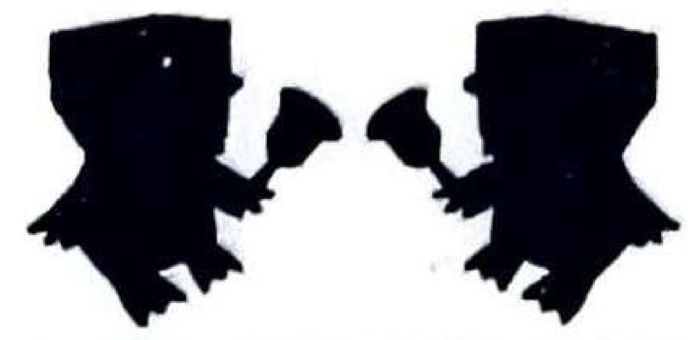
ガコン！ゴールと同時に床が抜け、グレゴリーは奈落の底に落ちていく。

グレゴリー　「お客さま～…お先に～…」

(私)にルーレット小僧が近づいてきてニヤリと笑い頭を差し出す！

ルーレット小僧　「次はゴールだね♥ はい！ 回して♥」

第十六夜
暗闇の中を走ることが
恐いのではなく、
道が続いていると
信じていることが恐ろしい…



ジェットコースター、スピードマウス号の乗り場
(私)は闇の中を落下していく。闇の底に見えるジェットコースターの座席に吸い込まれていく。
座席に着くと、切符きりのブラックダックが近づいてくる。

ブラックダック1　「お客さん、切符は持っているガア？」

(私)は慌てて首を横に振る。

ブラックダック1　「ただ乗りは困るだガア…降りてもらうしかないガア…」

グレゴリー　「お客さまのチケットは、このグレゴリーが預かっております…」

後ろの座席を振り返ると、グレゴリーが2枚のチケットを差し出している。

グレゴリー　「いえいえ、礼には及びません…これはひとつ貸しということで…ヒッヒッヒッ…」

切符きりはチケットを受け取ると、ベルを振り出発の合図をする。

ブラックダック1　「スピードマウスが出発するガア…」

スピードマウス号はゆっくりと山の頂点を目指して上っていく。
雲を抜けるとダイヤモンドダストのような美しい光の結晶が降り注いでいる。

グレゴリー　「オゥ！ビューティーフォー！！」

グレゴリーは降り注ぐ光の中、両手を広げ感動している。

グレゴリー　「御覧下さい、お客さま！くだけ散った魂のかけらでございます！」

グレゴリーが手に受け止めると、結晶は美しく輝き、かすかな叫び声をあげ消えていく。

グレゴリー　「逃げ出せるはずもなかろうに…ヒッヒッヒッ…」

そう言った瞬間、スピードマウス号は勢いよく坂を下り始める。雲を抜け再び暗闇に突入！

さまよえる魂　「た～す～け～て～く～れ～…」
「くるしぃ～…」
「かえりたい～…」

目の前に漂う魂が現れる。その中を疾走するスピードマウス号。

グレゴリー　「お～！叫んでおるわ、叫んでおるわ！愚かな魂どもが！！ヒッヒッヒッ！ヒィ～！！」

ジェットコースター、スピードマウス号の乗り場
ブラックダック2号がブラックダック1号に近づく。

ブラックダック2　「あれ、スピードマウス号は出発してしまったガア？」

ブラックダック1　「いけなかったガア？」

ブラックダック2　「いけなくはないガア…ただ、あの先レールがないガア…」

ブラックダック1　「…だから？」

ブラックダック2　「…別に…」

魂の浮上する闇の空間
スピードマウス号は途切れたレールから勢いよく闇の空間に飛び出す。

グレゴリー　「…私がおつき合いできるのはここまででございます…」

バッとグレゴリーの背中からパラシュートが開きスピードマウス号から脱出！

グレゴリー　「お客さま～…お元気で～…」

奈落の底に落ちていくスピードマウス号。グレゴリーはゆうゆうパラシュートで降下していく。

グレゴリー　「…道が続いていると信じることが、間違いなのです…ヒッヒッヒッ…」

グレゴリーは目の前を通り過ぎようとする魂を掴みツルッと飲み込む。

さまよえる魂　「キュ～！」

グレゴリー　「う～ん…鼻に抜ける愚かな香りがたまりません…ヒッヒッヒッ…」

第十七夜
闇の中を落下していたはずの僕は、
いつしか鏡の部屋に横たわっていた。
広がる鏡の世界…その中に
僕の姿はなかった…



鏡の部屋
鏡に自分の姿が映っていない事に困惑する(私)。

ミラーマン　「鏡に姿が映らない事がそんなにショックかい？」
どこからともなく声が響いてくる。声の主を探して部屋の中を見回す(私)。

ミラーマン　「どこを見てんだ、おいっ…ここだよ、ここ」
壁の鏡の奥からミラーマンが歩いてくる。鏡の中に立つミラーマン。
驚いて振り向く(私)。そこにミラーマンの姿はない。

ミラーマン　「知ってると思うけど、言っておくぜ。鏡は実体を映すんだよ！ここまで言えばどういうことか分かるよな…」
ミラーマンは鏡の中から飛び出す。壁の鏡が波紋のように揺れる。

ミラーマン　「君は実体がないって事さ！ほら！」
ミラーマンは(私)と並び、壁の鏡に姿を映す。ミラーマンは映るが(私)は映っていない。
ミラーマンは手探りで(私)の体を触る。

ミラーマン　「なっ！君の体はここにあるだろ？でも、実体はないんだよ！なっ！なっ！」
落ち込む(私)に椅子を引き、座るように促すミラーマン。

ミラーマン　「まあ、そんなに落ち込むなって！ほら、座って！さっ！さっ！」
(私)が椅子に座るとミラーマンは声を低くして話し出す。

ミラーマン　「…でもな、実体は映らなくても、真実を映す鏡はあるぜ…どうする？見たいかい？」
うなずく(私)にもう一度念を押すミラーマン。

ミラーマン　「…本当に真実を見たいのかい？…知らない方が幸せって事もあるぜ！…そうか、分かった！見せてやるよ、真実を…」
そう言ってミラーマンはテーブルに飛び乗り、自分の“真実の鏡”の扉をゆっくりと開ける。
隙間から光がもれ始め、真実の鏡がその姿を現す。

ミラーマン　「…これがおまえが見たかった真実の姿だよ…」
真実の鏡の中に黒い影が浮かび上がり、次第に形になっていく。
浮かび上がったその姿は、なんとグレゴリー！
驚いた(私)は真実の鏡に近づき、顔を触り、確かめる。

ミラーマン　「…なっ、なっ！見ない方がよかっただろ！ヒャハハハ！なっ！なっ！ヒャハハハ！」
平静を失った(私)は、椅子を持ち上げ真実の鏡めがけて投げ付ける。ガッシャーン！！
床に吹っ飛んだミラーマンがゆっくり起き上がると、ヒビの入った真実の鏡からミラーマンの不気味な目が覗いている。割れた鏡の間から血が流れ落ちる。

ミラーマン　「何をそんなに動揺してるんだ？…望んだのはお前だろ！」

グレゴリー　「お客さまの真実が私とは…はて、どういう事でございましょうか？…ヒッヒッヒッ…」
鏡の壁一杯にグレゴリーが映し出される。

グレゴリー　「お客さまと私は光と影…お客さまあっての私でございます…ヒッヒッヒッ…ヒッヒッヒッ…」
部屋中の鏡でグレゴリーが笑っている。(私)は椅子を振り上げ鏡の中のグレゴリーに向かって投げつける。

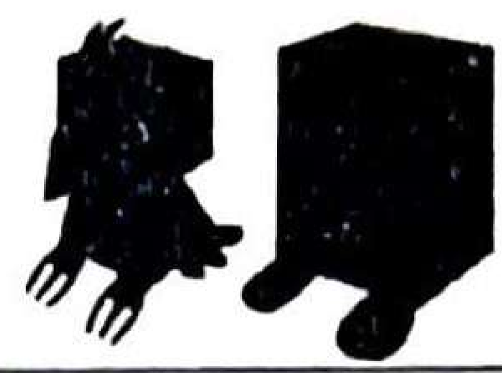
グレゴリー　「お、おやめ下さい、お客さま！」
ガッシャーン！！鏡の壁が砕け散る。割れた鏡の向こうに隠し部屋が現れる。
逆光にシルエットで浮かぶ、キンコとインコに近づいていく(私)。
床に砕け散った鏡の破片にグレゴリーが映っている。

グレゴリー　「ここまでやるとは…まずい事になりました…」

(私)は隠し部屋に足を踏み入れる。近づくにつれキンコとインコの姿がはっきりと現れる。
警報装置が働き、サイレンと赤い光の点滅。

インコ　「シンニュウシャハッケン！シンニュウシャハッケン！」

第十八夜
大切な何かをなくしていた。
せつなくて、哀しくて、はかない、
そして温かいものを…
僕は、なぜ気づかなかったのだろう…



隠し部屋

羽をばたつかせ、大騒ぎするセキュリティーインコ。

インコ　「シンニュウシャハッケン！シンニュウシャハッケン！」

ひとしきり騒いだ後、キンコから飛び下り壁のサイレンのスイッチを切る。

インコ　「あ～、よ～騒いだ…待ってましたでぇ～あんさん！長かったわあ～ほんま」

キンコが騒ぎで目を覚まし、のびをしながら大きなあくびをする。そのせいで床に落ちてしまうインコ。

インコ　「わわっ、お前何すんねん！！」

キンコ　「ああ～よく寝た…あれ～誰かいるぞぉ～あれ～…君はぁ～君はぁ～…」

インコ　「もうええわいっ！お前は黙っとれ！！」

キンコのモソモソしたしゃべり方にイライラして、どつきだすインコ。

インコ　「あんさんが来るまで、こいつとずう～っとふたりきりでっせ！もう、どうにかなりそうですわ！」

キンコは（私）に近づく。

キンコ　「僕は夢を見ていたんだなぁ～…夢の中で君と友達になったんだな…」

世界がお花畑に変わる。（私）とキンコのラブラブ追いかけっこ。

キンコ　「まあてぇ～…よおし…つかまえるぞお～…あ～…そのまま…行くとお～…」

視界が急に変わり、（私）は崖を落下していく。

キンコ　「崖なんだな～…」

崖の上から覗き込むキンコが小さくなっていく。キンコは崖の手前に何か落ちている事に気づく。

キンコ　「…あれえ～…なんか…落としていったぞお～…」

覗き込んでいるキンコの顔に淡い光が映り込んでいる。

隠し部屋

長い回想シーンに飽き、インコはキンコの上で葉巻きをふかしながら肘をつき横になっている。

インコ　「やれやれ、やっと終わったか…」

起き上がるインコ。

キンコ　「君の落とし物…ずう～っと、預かってたんだな～…僕は…」

インコ　「誉めてやってや！コイツはず～っと守ってたんやでぇ～。あの薄汚いネズミにしばかれ続けてもガンとして扉を開けなかったんや！」

ゆっくり扉を開けるキンコ。淡いピンク色の光がもれ始める。（私）は光の中に吸い込まれる。
一面のお花畑、落ちているハートを見つけ、拾い上げる。しかし、持ち上げた瞬間、ハートは溶け始める。

インコ　「急ぐんや！あんさんのハートが溶け始めてるんや！」

キンコ　「もう、なくさないでね～…」

インコとキンコの声がお花畑に響く。

グレゴリー　「扉を開けなさい！えーい！聞こえないのか！」

隠し部屋に現れたグレゴリー。しかし、すでに（私）はキンコの中。
グレゴリーはなんとか扉を開けさせようとキンコをしばきたおす。

キンコ　「無理や、無理無理…こいつが眠り始めたら、いつ目を覚ますかワイにも分からんのや…」

グレゴリー　「あいつに逃げられたら、お前らもどうなるか分かっているはずだぞ！」

突然、天井からクレーンが降りてきて、グレゴリーを掴み上げる。

グレゴリーママ　「なんという失態…覚悟はできておるな、グレゴリ～…」

グレゴリー　「お～ママ、お許しを…」

グレゴリーはクレーンに掴まれ、天井に消えていく。

インコ　「やれやれ、また、お前とふたりっきりかい…へへっ、それもまたいいか…」

インコはキンコに寄りかかり、満足そうな笑みを浮かべる。
クレーンに首根っこを掴まれ、暗闇を移動するグレゴリー。その先に無気味な人影。

グレゴリーママ　「グ～レ～ゴ～リ～…」

待ち構えているグレゴリーママのアップ。

グレゴリー　「オゥ～…ノゥ～！！」

第十九夜
相変わらず道は見えない、
ここが何処かすら分からない…
しかし、取り戻した僕のハートが
前に進めと脈打つのを感じる。



グレゴリーママの部屋

暗い室内、椅子に座っているグレゴリーママをスポットが浮かび上がらせている。
棚には魂の入った瓶が並び、淡く光を放っている。
グレゴリーは頭をクレーンで掴まれたまま、椅子に座っているグレゴリーママに近づいていく。

グレゴリーママ　「グ～レ～ゴ～リ～…」

グレゴリー　「お、おおっ…ママ…」

グレゴリーの表情が恐怖に歪む。クレーンから落とされるグレゴリー。

グレゴリーママ　「なんてザマだい。…あいつを逃がすって事がどういう事か、お前にも分かっているはずだろ！」

グレゴリーママはグレゴリーに近づき、杖で頭をコンコン叩き始める。

グレゴリーママ　「ここには一体、何がつまっているんだい…？」

グレゴリー　「や、やめて下さい、ママ！分かってますから！」

グレゴリーママ　「分かってるんだったらさっさとおゆき！まったく、どうしようもない子だよ、この子は…」

グレゴリーはママに背を向け歩き出し、ぼそりと呟く。

グレゴリー　「まったく、食えないババアだ…今に見ていろ…」

グレゴリーママの目が赤く光り出す。

グレゴリーママ　「何か言ったかい…グレゴリ～…」

グレゴリー　「い、いえ…ママはいつまでもお若いと申しただけでして…」

グレゴリーママ　「ホ～ホッホッホ…ごらんグレゴリー…」

棚に並んだ魂の封じ込められた瓶を指差すグレゴリーママ。

グレゴリーママ　「現実に未練たっぷりの魂達を…私の若さの秘訣さ…」

グレゴリーママは瓶をひとつ手に取り、蓋を開けてグイッと飲み干す。

グレゴリーママ　「う～ん…効くわあ～…あいつの魂を飲んだらどれだけ若返るかしら…ホォ～ホッホッホ…」

高笑いするグレゴリーママを、呆れ顔で見ているグレゴリー。

グレゴリー　「恐ろしや、若さに対する執念…」

お花畑

(私)がお花畑を彷徨っていると、聞き覚えのある曲が流れてくる。

審判小僧　「♪僕の名前を知ってるか～い♪…ジャッジメ～ント！」

いきなり空から審判小僧が落ちてくる。

審判小僧　「君は恋する高校生。片思いの彼女とバス停でふたりきり。告白する絶好のチャ～ンス！君ならどうする？
…な～るほど…君は思いきって告白するというんだね？それじゃあ、真実の天秤に聞いてみよう！
ジャッジメ～ント！はい、カックン！
緊張のあまり、その場を逃げ出した君は、彼女には彼氏がいると無理矢理思い込み、あきらめる事にしました。これが真実、はいおしまい！」

ドーン！！(私)の後ろに一枚のドアが落ちてくる。驚いて振り返る(私)。

審判小僧　「さあ、どうする？勇気を出して開けてみるかい…？それとも無難にやめておくかい…？」

ドアを見つめ躊躇する(私)。

審判小僧　「そろそろ、自分で判断してみてはどうだい？」

(私)は覚悟を決め、ドアを開ける。薄い緑色の淡い光がもれ始め、地下に下りる階段が現れる。

審判小僧　「さあ、行きなよ。自分の選んだ道なんだから…」

(私)は地下に下りる階段に足を踏み出す。

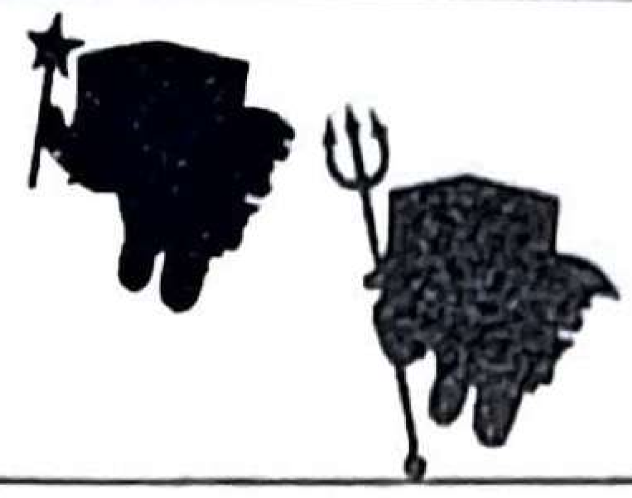
廊下

歩きながら呟くグレゴリー。

グレゴリー　「まあ、焦る事はございません…外に出るにはどのみち、あそこを通るわけですから…ヒッヒッヒッ…」

階段を下りていく(私)。グレゴリーの笑い声が響く。

第二十夜
僕が選んだ道だった。
自ら踏み出した道のはずだった…
己の判断に疑問を抱いた時、
すべては閉ざされていく…



地下通路

薄暗い廊下を歩き出す(私)。壁に埋め込まれたモニターが、手前から順に光り出す。

グレゴリー　「お客さま…」

グレゴリーの顔が無数のモニターに浮かぶ。

グレゴリー　「何処かにお出かけでございますか…？」

グレゴリーの声に驚き地下通路を走り出す(私)。

グレゴリー　「…ヒッヒッヒッ…どこに向かっておられるのですか、お客さま…」

地下通路は突き当たりで二股に分かれている。

グレゴリー　「どちらに行くおつもりですか、お客さま…」

(私)は左の道を選ぶ。

グレゴリー　「おや…？そちらで本当によろしいんですか…ヒッヒッヒッ！」

グレゴリーの笑い声が響く中、左に曲がり走り出す(私)。しかし、その先は行き止まり。

グレゴリー　「残念でございました、お客さま。行き止まりでございます…」

あわてて後ろを振り向くと、走ってきたはずの道は壁になっている。
両側に3個ずつモニターが付いた部屋と化した地下通路。

グレゴリー　「おやおや、戻る事もできなくなってしまいましたよ…どういたします、お客さま…ヒッヒッヒッ…」

モニターに202号室の扉が浮かぶ。

グレゴリー　「お疲れになったでしょう…お部屋にお戻りになって、お休み下さい…。お客さま！」

扉がゆっくり開いていく。(私)は操られるように扉に近づいていく。
まさに、扉に吸い込まれそうになった時、誰かの声が響く。

エンジェルドッグ　「こらこら、しっかりしなさいよ！いいの？そんなことで…？」

ひとつのモニターに、キラキラとまばゆい光と共に、エンジェルドッグが現れる。

エンジェルドッグ　「あなた、道は閉ざされたと思っているんでしょ？そう思い込んでいるだけ！
道は続いているのよ、あなたの目の前に！」

グレゴリー　「何をたわけた事を！お客さま、こんなインチキ臭い犬の言う事に、耳を貸してはいけませんぞ！」

エンジェルドッグ　「何よ！犬で悪かったわね！あんたこそ、うさん臭いネズミじゃない！」

グレゴリー　「う、うさん臭いだと！お客さま！愚か者は放っておいて、お部屋に戻りましょう。
他に道はないのですよ、お客さま！」

見回してみても周りは壁に囲まれ、道は見つからない。

エンジェルドッグ　「しょうがないわねぇ…まだ、あなたには手助けが必要なようね…」

エンジェルドッグはキラキラと光の粉をまき散らしながら、モニターから飛び出る。

エンジェルドッグ　「今回だけは助けてあげる。いい？今回だけよ！」

そう言ってエンジェルドッグは手に持ったステッキをひと振り。キラキラと光の粒子が壁に降り注ぎ、鉄製の梯子がかかる。(私)が近づいて上を見上げると、先はマンホールのように外に続いている。

エンジェルドッグ　「さあ、早く行きなさい…」

(私)とエンジェルドッグの会話の後ろで、グレゴリーは必死で叫んでいる。

グレゴリー　「お客さま、騙されてはなりませんぞ！そいつの口車に乗って、いくつの魂が散っていったか！
天使の姿をしていても、しょせんは犬ですぞ！犬！ワンワンでございますぞ！」

(私)は梯子に手をかけ登り始める。エンジェルドッグの声が響く。

エンジェルドッグ　「でもね、覚えておいてね。道はあったのよ、初めから…あなたが見ようとしなかっただけ…」

(私)は力強く梯子を登り、ついにグレゴリーハウスの外に出る。

地下通路

グレゴリー　「どいつも、こいつも、事の重大さが分かっておらん！あいつを逃がしたらどうなるのか…」

エンジェルドッグ　「あら、逃がしてなんかいないわ！私は導いているだけよ…どこに導くかは…」

ボ～ン！！煙と共に、エンジェルドッグの姿がデビルドッグに変わる。

デビルドッグ　「その日の気分次第なの…ケケケケ…」

第二十一夜
建ち並ぶ墓標の下には
誰が眠っているのだろう…
逃げまどう僕と、眠る彼等、
その境がぼやけ始めている…



(私)はマンホールを外に向かって登っていく。

墓場

マンホールから外に出たところは、霧の漂う墓場。逃げまどう(私)。グレゴリーの声が響く。

グレゴリー　「お客さま～…お戻り下さ～い…もう、お遊びは、おやめ下さいませ～…」

走り疲れた(私)は墓石の後ろに身を隠す。グレゴリーは、一枚一枚墓石の後ろを覗きながら(私)を探している。

グレゴリー　「お客さま…この辺りにお隠れになっている事など、お見通しでございますぞ…」

近づいてくるグレゴリーの声に緊張が走る。
“ガサッ”(私)の立ててしまった音にグレゴリーが気づき、視線を向ける。

グレゴリー　「ヒッヒッヒッ…そこにいらっしゃいましたか…」

じわじわ近づいてくるグレゴリー。(私)は心臓の音が速くなるのを感じる。

グレゴリー　「…お客さま！」

見つかったと思った瞬間、(私)は墓の中へ引き込まれる。

グレゴリー　「…ここにもいない…と…まあ、仕方ありません、お帰りになるのをゆっくり待つといたしましょう…ヒッヒッヒッ…」

グレゴリーはゆっくりグレゴリーハウスに向かい歩き出す。

墓の中

真っ暗な墓の中、ポッ…ポッ…っと蝋燭がついていく。
苔むした壁、棺、テーブル…。
椅子に座った干からびた死体の姿が、次第に浮かび上がっていく。

干からびた死体　「危ないところだったね…ここまで逃げてきたのは君が初めてだよ…どう、一杯飲むかい？」

干からびた死体は、赤ワインをグラスに注ぎ(私)に勧める。

干からびた死体　「そう、いらないの…？」

そう言いながらワインを口に含む。一瞬、顔に赤みがさすが、すぐに消えてしまう。

干からびた死体　「僕もここから出たいんだよ…でも、この身体でしょ…」

グラスにワインを注ぎながら話し続ける。

干からびた死体　「風が吹けば崩れちゃうし、雨が降れば溶け出しちゃうし、ここでこうやって飲んでるしかなかったんだ…でも、ついにここから出られるんだよ…」

グイッとワインを飲み干し、立ち上がり(私)に迫る。

干からびた死体　「君の身体をいただいてね…」

(私)に襲いかかる干からびた死体。慌てて墓の中から逃げ出す(私)。

干からびた死体　「身体をよこせ～…」

墓から出て(私)を追いかける干からびた死体。逃げる(私)の足下から次々と腕が突き出し行く手を遮る。

干からびた死体　「生身の身体がほしい～…」

(私)は突き出る手を避けながら、グレゴリーハウスに逃げ込み扉を閉める。
外では干からびた死体が扉を叩いている。

干からびた死体　「身体をよこせ～…」

背中に気配を感じて振り向くと、グレゴリーが立っている。

グレゴリー　「お帰りなさいませ、お客さま…お部屋のお掃除は済んでおります…ヒッヒッヒッ…」

第二十二夜
逃げられない、
もう、逃げる気力もない…
再びこの部屋に戻って、
ほっとしている自分に驚いている…



部屋の中
ドアを閉めかけてグレゴリーが(私)に話しかける。

グレゴリー　「お客さま、お疲れになったでしょう…もう、何もかも忘れて、ぐっすりお休み下さいませ…すべてを忘れて…ヒッヒッヒッ…」

廊下にグレゴリーの声が響く。がっくりとベッドに腰掛け、うなだれる(私)。
隣の部屋からネコゾンビの泣き声が響いている。

ネコゾンビ　「…諦めちゃうのかニャ…？」

隣の部屋からネコゾンビの声がする。

ネコゾンビ　「君はもう、諦めてしまうつもりなのかニャ…」

まともに話しているネコゾンビに(私)は驚き、隣の部屋に向かう。鉄の扉の前でたたずむ(私)。

ネコゾンビ　「…カギは開いてるニャ…」

意外な言葉に驚きつつも、(私)は重い鉄の扉を開け部屋に入る。ネコゾンビは壁に寄りかかって座っている。

ネコゾンビ　「君には待ってる人がいるニャ…それでも諦めてしまうのかニャ…？」

ネコゾンビの言葉にドキッとする(私)。ネコゾンビは立ち上がり(私)に近づいてくる。

ネコゾンビ　「この世界は目に見えるものを信じちゃダメニャ…思いの強さがすべてニャ…」

エンジェルドッグ「そうよ！その通りよ！」

キラキラとまばゆい光と共に、エンジェルドッグが現れる。

エンジェルドッグ「…しょうがないわねえ…あんた、まだこんなところをウロウロしてたのね？」

エンジェルドッグは手にしたステッキをひと振り、キラキラッとまばゆい光と共に"運命のドア"が現れる。
ドアには"HEAVEN or HELL"と書かれた金属のプレートが埋め込まれている。

エンジェルドッグ「これが最後よ！どうするの？開けてみる？ それとも、やめておく？」

(私)は意を決し、ノブを強く握りドアを開ける。ドアの中はまばゆい光で溢れている。

エンジェルドッグ「さあ、行くの？行かないの？自分で決めなさい！」

(私)がネコゾンビに目をやると、ネコゾンビは静かに頷く。(私)は光の中に足を踏み入れる。

エンジェルドッグ「あんたは行かなくていいの？」

ネコゾンビ　「やめとくニャ…オイラの帰る場所はないニャ…」

ボワッ！！白い煙と共に、エンジェルドッグはデビルドッグに姿を変える。

エンジェルドッグ「ま、その方がいいかもね！天国か地獄か、運次第だもんね！ケケケケ…」

グレゴリー　「お客さま！！」

隣の部屋からグレゴリーの声が聞こえてくる。

グレゴリー　「ええ～い！今度はどこに行ったのじゃ！」

グレゴリーの足音が近づいてくる。デビルドッグはステッキをひと振り、光と共に消えていく。

デビルドッグ　「じゃあねぇ～！」

ドアが開いているのに気づいたグレゴリーが部屋に入ってくる。

グレゴリー　「おい、ここにあいつが来なかったか？」

ネコゾンビ　「おなか減ったニャア…ご飯まだかニャア…」

いつものように、部屋の中で徘徊をくり返すネコゾンビ。

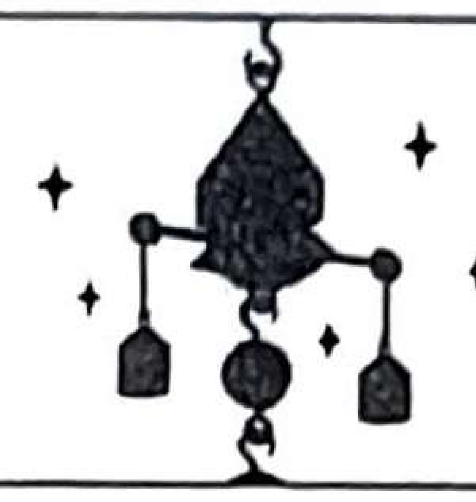
グレゴリー　「お前に聞いても無駄じゃな…哀れなやつめ…」

(私)を探しに部屋を出ていくグレゴリー。

グレゴリー　「お客さま～！どこでございますか～…お客さまあ～！」

ネコゾンビ　「逃げられるといいニャア…」

第二十三夜
天国か地獄か…
それは、もうどうでもよかった。
自分で判断した事、
それが、重要だった。



サイケな空間

サイケデリックな空間を(私)は歩いていく。何処からともなく聞き覚えのある歌の輪唱が聞こえてくる。

審判小僧(4体)　「♪僕の名前を知ってるか～い♪審判小僧というんだよ～♪(4体の輪唱で)…ジャッジメ～ント!(4体順番に)」

4体の審判小僧が次々と上から降りてくる。

審判小僧1　「バナナとチョコレート、遠足に持っていくのはどっち?」

審判小僧2　「嫁と姑、どっちの味方をする?」

審判小僧3　「空き巣と食い逃げ、犯罪を犯すのならどっち?」

審判小僧4　「マックとウィンドウズ、どっちを買う?」

ドラムロールとファンファーレ、野太い声でテーマソングがサイケな空間に響く。

審判小僧ゴールド「♪僕の名前を知ってるか～い♪審判小僧というんだよ～♪…ジャッジメ～ント!」

ビッグサイズの審判小僧ゴールドが空から降りてくる(全身、黄金で身を包み、胸にGの文字が浮かび上がっている)。

審判小僧ゴールド「逃げる君の可能性がすべて崩れ落ちていく…」

(私)の立ってる場所だけ残して、周りの地面が崩れ落ち、闇に吸い込まれていく。

審判小僧ゴールド「進む事も、戻る事も、もはやできない。さあ、君はどうする?」

審判小僧ゴールドを取り囲んだ4体が順番に判断を迫る。

審判小僧1　「どうする?」

審判小僧2　「どうする?」

審判小僧3　「どうする?」

審判小僧4　「どうする?」

審判小僧ゴールド「さあ、どうする?」

審判小僧ゴールドが判断を迫る。焦る(私)。周りを見回しても道はない。

ネコゾンビ　「この世界は目に見えるものを信じちゃ駄目ニャ…思いの強さがすべてニャ…」

ネコゾンビの声が何処からともなく聞こえてくる。
意を決した(私)は何もない暗黒の区間に足を踏み出す。その瞬間、光り輝く道が現れる。

審判小僧(全員)「ジャッジメ～ント!(全員声を揃えて)」

審判小僧1　「カックン!」

審判小僧2　「カックン!」

審判小僧3　「カックン!」

審判小僧4　「カックン!」

4体の審判小僧が順番に$を落としていく。

審判小僧ゴールド「はい、カックン!」

審判小僧ゴールドの大きい$が落ちて砕け散る。

審判小僧ゴールド「君は初めて自分で道を作りました。そして君はその道を胸を張って歩いていきました。これが真実、はい、おしまい!」

(私)は光り輝く道を歩いていく。審判小僧ゴールドの歌が響く。

審判小僧ゴールド「♪僕の名前を知ってるか～い♪審判小僧というんだよ～♪」

審判小僧4体　「ゴールド!」※合の手

グレゴリーハウス玄関

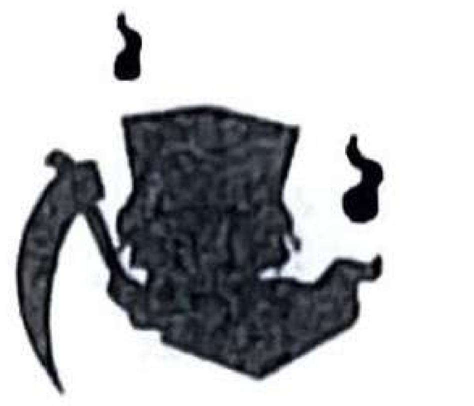
グレゴリーは玄関を出て辺りを見回す。

グレゴリー　「お客さま～!!…」

グレゴリーハウスが薄くぼやけ始める。

グレゴリー　「ついに始まってしまいましたか…」

第二十四夜
僕は戻ろうとしている。
再び繰り返される日常に…
断ち切れぬ思いが、
あの月のない夜を思い出させる…



輝ける一本道
目の前に道が続いている。現実に向かい、ひた走る(私)。

グレゴリー　「お客さま～…」
グレゴリーの声に驚き、恐る恐る振り返ると、グレゴリーのエクトプラズムが追いかけてくる。

グレゴリー　「お待ち下さ～い…」
(私)は驚き、走る速度を上げる。にわかにかき曇る空。稲妻が(私)の進路を崩していく。

グレゴリー　「お客さま～逃げられるわけがないのですよ～…」
途方に暮れる(私)。
"チリ～ン…チリ～ン…"無気味な鈴の音が聞こえてくる。

死に神　「断ち切ったろか～…その思い断ち切ったろか～…」
逃げる(私)の行く手に黒いモヤが集まり、死に神の姿に変わる。

死に神　「あんさん、なんで逃げられへんのか不思議でっしゃろ…よう見てみいな、あんさんとあいつの間…」
(私)が振り向くと、グレゴリーのエクトプラズムが迫ってきている。
よく見ると、(私)とグレゴリーのエクトプラズムの間は、白いヒモのようなもので繋がっている。

死に神　「なんやと思いまっか…？」
グレゴリーのエクトプラズムは、白い魂のヒモをたぐり寄せている。

死に神　「…それはな、あんさんのこの世界を断ち切れん思いや…
あんさん、もしかしたらほんまは現実に戻りとうないんちゃいまっか？」

グレゴリー　「お客さま…思い出して下さい、お客さまは逃げ出したかったのですよ、現実から…
自ら望んだのですよ、この世界を…ヒッヒッヒッ…」

死に神　「現実いうても夢の楽園とちゃいまっせ、あんさん、つまらん日常の繰り返しでっせ」

グレゴリー　「ヒッヒッヒッ…私はお客さまの満たされぬ心なのでございます…
日常に押し殺された欲望の姿なのです…ヒッヒッヒッ…」

死に神　「ほら、追いつかれるで～断ち切りたいのやったら手ぇ貸すで～どないする～？」
死に神の大きな鎌がキラリと光る。慌てるグレゴリーのエクトプラズム。

グレゴリー　「思い出して下さい、あの月のない夜を！満ち足りぬ心に気づいたあの夜の事を！」
グレゴリーは魂のヒモをたぐり寄せ、じわじわ近づいてくる。(私)は断ち切る決心をする。

死に神　「そうか～。ほな、バッサリいくで～」
死に神は大きな鎌を勢いよく振り下ろす。
魂のヒモは断ち切れ、弾き飛ばされた(私)は、白い光の中に吸い込まれていく。
グレゴリーがスローモーションで小さくなっていく。

グレゴリー　「お客さまぁ～…お部屋を開けて～お待ちしております～」
グレゴリーハウスの出来事がフラッシュバックで流れる。
そして、ホワイトアウト。

第二十五夜
彷徨える魂よ、己の姿を見よ。
うつろな目で、希薄な現実を漂う
その哀れな姿を…



現実のキッチン

現実のキッチン（モノクローム）の映像が流れている。妻と子供の声が、空しく頭の中を空回りする。

愛する妻　「あなた、早くしないと会社に遅れるわよ。ほら、あんたも早く食べて！残さないの、ほら！」

最愛の子供　「もう、いい！おなか一杯！」

愛する妻　「忘れ物ないの？」

愛する子供　「大丈夫！パパ、行ってきまーす！」

愛する妻　「パパ、ちょっとはあの子に言ってあげてよ！忘れ物ばかりしてるのよ！…もう……そろ…勉強の…成績が…この頃…………」

妻の声が乱れ始める。（私）の耳にはもう入らない。空しく流れていくだけ。

オフィス街の歩道

出勤途中のサラリーマンの群れ。（私）もその中にいる。前を歩く人々の後ろ姿が一瞬、ハニワサラリーマンに変わる。驚いて立ち止まる（私）。また一瞬ハニワサラリーマンに変わる。
（私）が恐る恐る振り返ると、歩いている人々がすべてハニワサラリーマンへと姿を変えている。

ハニワサラリーマンの群れは、立ち止まっている（私）など気にするそぶりも見せず、黙々と歩いていく。
（私）はゆっくりと横のウィンドウに目を向ける。そこには、ハニワサラリーマンと化した自分の姿が映し出されている。
愕然とする（私）。
（私）はハニワサラリーマンの流れに逆走し、フラフラと歩き出す。
交差点で立ち止まり、ビルの壁に取り付けられたオーロラビジョンを見上げる。
モノクロームの世界に唯一、色の付いた映像が流れている。
霧の立ちこめる森を歩いている映像に、なぜか懐かしさを感じる（私）。辺りを静かに霧が包んでいく。

霧の立ちこめる森

気がつくと（私）は霧のたちこめる森の中を彷徨っている。
遠くに明かりが見える。近づくにつれ、無気味な館が浮かび上がる。
そこは、グレゴリーハウス。軋む音を立てながら扉が開く。

グレゴリーハウスフロント

廊下の暗がりからグレゴリーが歩いてくる。

グレゴリー　「お帰りなさいませ、お客さま…お部屋の御用意はできております…ヒッヒッヒッ…」

廊下の暗がりに歩き出したグレゴリーは、途中で振り向く。

グレゴリー　「だいぶ現実にお疲れになったようで…ごゆっくりお休み下さいませ…
…なにせこの世界はお客さまのものでございますから…ヒッヒッヒッ…ヒッヒッヒッ…」

1stシリーズ気になる用語集

毎話、2分30秒という超短時間の放送の中で瞬間的に登場する気になる用語をピックアップ。

悪魔【あくま】

地獄からの使者。世界各国、歴史を通していろいろな形状で現れるため実態は不明。さまざまな事件を起こしたり、より複雑にしたりと、忙しいことこの上ない。人に悪魔と呼ばれればそれは悪口だが、小悪魔だとホメ言葉なのが不思議。

【第二十夜】

頭に斧【あたまにおの】

斧は木を効率よく割るための道具で、主にきこりが使うもの。当然人間の頭に突き刺していいものではない。脅しの凶器としてはかなり効果的かもしれないが、それを上手に振り下ろすのはなかなか難しいはず。

【第一夜】

インコ【いんこ】

オウム目に属する鳥類でセキセイインコ、コンゴーインコなどの総称。グレゴリーハウスに住みついているインコは、感情過多なタイプらしく、大阪弁で口上をまくしたてている。なぜか、おっとりしたキンコとは相性がいいらしい。

【第十八夜】

占い【うらない】

気弱になっている時、心を落ち着かせたい時に効果的な行為。星占い、血液型占い、姓名判断 、風水 、四柱推命、六星、八星、九星占術、易 、夢判断 、手相、指紋相、爪相、バイオリズム。どれかいいこと書いてあるだろ。

【第十四夜】

エクトプラズム【えくとぷらずむ】

霊的物質で粘着性物質が目に見える形となったもの。ふわふわと不定形で、色や匂いがあるともいわれている。その物質を媒介に魂が姿を表すこともある。

【第二十四夜】

エプロンとキャップ【えぷろんときゃっぷ】

スピードマウスの走行を担当するブラックダックの制服。カラフルで楽しげなデザインだが、ファーストフードの店員のように見えるので、ブラックダックの間では不評。しかしこれを着けないと、見分けられないということでしぶしぶ着用している。

【第十六夜】

骸骨【がいこつ】

『グレゴリーホラーショー』記念すべき第一夜のファーストカット。ホテルフロントをぐるりと映し、フロント奥の棚にズームアップ。そこに人骨と思しきモノが無造作に置かれている！　泊まり客にココは怖いところですよ、と微弱な信号を発信。

【第一夜】

鏡【かがみ】

光の反射を利用して姿かたちを映して見る道具。「影見」転じて鏡となる。古くは銅合金など金属を用いたが、現在は、ガラス板の裏面に銀メッキを施して作る。古来より霊的なもの、婦女の魂として尊重する風潮があった。

【第十七夜】

鏡に姿が映らない【かがみにすがたがうつらない】

魔物は鏡に映らないという言い伝えがあり、その代表格として、よく吸血鬼や悪魔が例にあげられる。また、鏡は左右反対に物を映すものなので、厳密にいえば自分の本当の姿を映すことは当然できない。手本、模範という意味もある。

【第十七夜】

金庫【きんこ】

もう露とも残っていないと思っていた大切な何か……切なくて哀しく、はかなくて、温かいもの。それは、鍵がかけられてはいるけれど、ちゃんと心の金庫にしまわれていたのでした。もちろん鍵をかけたのはあなた。鍵を開け、解き放つのもあなた自身。

【第十八夜】

金の差し歯【きんのさしば】

差し歯とは人工の歯のこと。金は高価な金属。金で作った差し歯はリッチな人物を示唆しており、また差し歯が必要なことから推測して年齢が若いということもないだろう。この犠牲者、なぜグレゴリーハウスを訪れたのだろうか？

【第五夜】

グレゴリーケーブルテレビ【ぐれごりーけーぶるてれび】

記憶が鮮明ならば、あなたの一生を映画にして放送してくれる親切なテレビ局。「グレゴリーホラーショー」は好評につき、放映中。このほか「グレゴリーの若かりし日々」「グレゴリーママのファッションチェック」などの人気番組もあり？

【第十夜】

黒子【くろこ】

正式には「くろご」と読み、黒衣と書く。歌舞伎の舞台で後見(こうけん／舞台を手助けする人)が着用する黒い衣服のこと。また着用している人のことも黒子と呼ぶ。そこから、陰でさまざまなことを手助けする人を表すこともある。

【第十二夜】

携帯電話【けいたいでんわ】

この不景気の時代にあって、あっという間に一般化され、当然のように月々1万円近くを持っていく機械。電話を持ち歩くなんて、ひと昔前ならSFの世界の出来事なのに…。携帯電話の出現でCDの売上げは激減したらしい。人間関係さえも一変させる。

【第十一夜】

決闘【けっとう】

はたしあい。両者の間での解決し難い問題、あるいは恨みから起こる争いの決着をつけるために、取り決めたルールで闘うこと。生命を賭けることもままある。

【第九夜】

拳銃【けんじゅう】

現在日本で流通している拳銃(警察使用品を除く)は、もちろん密輸品なので、弾がまっすぐ飛ぶことはまれなのだそうだ。だから試し撃ちは絶対必要条件。本気でコロシをする時は、出刃包丁を使ったほうが…。

【第九夜】

コイン【こいん】

パチンと投げて手のひらで受け取った時に、表か裏かで順番やすべきことを選ぶ簡単な選択術。コインに運命を預けるのは、よくあるパターン。また、どっちが裏か表かでもめるのも、よくあるパターンだろう。

【第九夜】

公衆電話【こうしゅうでんわ】

携帯電話が普及して、次第に無視されつつある存在。グレ電、赤電、ピンク電など多種多様。たまに使うと、いろいろな機能が追加されていて興味深い。そのうちFAXが送れたり、ゲームのデータが購入できるようになったりして。

【第十一夜】

ゴールド【ごーるど】

ア〇ックスゴールドカード、マルチ商法におけるゴールド会員など、1ランク上を表現する言葉。1ランク上への媚びも漂う。審判小僧ゴールドは、その研ぎ澄まされた禅問答でゴールドの地位を獲得。お手本はアニメの「一休さん」かな。

【第二十三夜】

サーベル【さーべる】

頭痛を訴えるミイラ父ちゃんの頭で輝く凶器。西洋風の刀剣。洋剣。洋刀。漫画「ベルサイユのばら」のオスカルが腰に提げていたことで知られるが、日本でも戦前は、警察官や軍人が人を威圧する目的で携帯していた。サーブルとも発音する。

【第七夜】

採血【さいけつ】

輸血・血液検査などのために、腕を縛って静脈を浮き立たせ、そこから血液を採取すること。血の成分でその時々の体調が分かる。そのため血で性格＆運勢判断する“採血占い”なんてのがあっても不思議じゃない……かもしれない？

【第六夜】

サイコロ【さいころ】

ちんちろりんなどで使う、博打打ちの必須アイテム。象牙または木製で、立方体の各面に反対側の面との合計が7になるよう、1から6までの点が刻まれている。一般家庭では、正月にすごろくで遊ぶ際に必要。

【第十五夜】

THE JUDGMENT DAY【ざじゃっじめんとでい】

審判小僧は歌う。金と愛情、秤にかけりゃ～。世の中のあらゆる問題は、金銭面と愛情面のどちらかにより分けることができる。しかし人間はいつも、金と愛情の両方を求めている。いずれどちらかを選択しなければならないのに。

【第二夜】

SECRET NUMBER【しーくれっとなんばー】

インコ着用のTシャツに描かれた文字。あなたの心にある金庫なのに、あなた自身が知らない秘密の暗号がある。それは何もかも捨て去って、心がデフォルトな状態になった時に初めて自動的に発想できる。たまには心に隙を作らないと。

【第十八夜】

実写【じっしゃ】

実際の風景や場面を写真や映像に写しとる、または写したものを指す。アニメーション作品の中にいきなり実写が混じると、現実に引き戻され、そのギャップにより視聴者に混乱をもたらす。インパクトを与えるテクニックとしては非常に効果的。

【第二十五夜】

死に神【しにがみ】

死期が近づくと「天国もええで～、地獄も意外に住み心地ええで～」と囁く役どころ。死に神が来ると死期が近くなるのか、死期が近づくと死に神が現れるのかは、卵とニワトリの関係。生きる気力を失ってしまうとマジで狙われます。

【第二十四夜】

痺れ【しびれ】

痺れること。体の全体あるいは一部が麻痺してうまく動かせない状態を指す。電気などで「びりびり」と感じることや、興奮してうっとりした時にも「しびれる」と表現することがある。

【第六夜】

紙幣【しへい】

紙で作った貨幣で、万国共通して偉人や名跡のイラストが描かれていることが多い。今後、渥美清や美空ひばりの紙幣が誕生する可能性も否定できない。グレゴリーハウスの中ではグレゴリーの肖像が描かれた紙幣が流通しているようだ。

【第十一夜】

JACK KETCH【じゃっくけっち】

ネコゾンビのTシャツに縫い付けられた文字。英国はロンドンにあった処刑場で死刑執行人をしていた男の名前。実在の人物かどうかは定かではないが、転じて死刑執行人の隠語と捉えられている。嫌な奴っぽい語感が説得力あり。

【第三夜】

水晶玉【すいしょうだま】

無色透明な石英を球形に磨き上げたものが水晶玉。占い商売には欠かせないグッズで、占い師が何らかの方法で念ずると必要な情報が投影される仕組みらしい。ミステリアスな雰囲気作りにも役立つ。

【第十四夜】

スープ【すーぷ】

料理は“ダシが命”。煮込めばなんでも美味くなりそうな気もする。だからといって、人間から上質のダシが出るのだろうか。ちなみに食人は仲間への追悼の意を表す場合と、敵に対する復讐や勇気を誇示するために行う場合などがある。

【第五夜】

SPEED MOUSE【すぴーどまうす】

ジェットコースターの名前。その名の通り速くて、長くてスリル満点。アバウトな経営体制のため、レールがなくても走らせている。そのせいで事故が起きても、気にしないシステム。なぜコレがグレゴリーハウスの地下にあるのか……？

【第十六夜】

TIME IS MONEY【たいむいずまねー】

時は金なり。時間を売買できる人間はいないが、自分の労働能力を時間で量り売りすることは可能。っていうか普通の労働者は皆そうしている。給料÷労働時間で、自分の1時間がいくらなのか計算できます。

【第十三夜】

注射器【ちゅうしゃき】

体内に薬液を投入する器具。あるいは体内から血液を抜くこともできる。細く筒状になった注射針、液体が入る容器とその容器に合わせたピストンで構成される。キャサリンは相当数の注射器をコレクションしている。

【第六夜】

テレビジョン【てれびじょん】
画像を電気信号に変換し電波によって送信する。これを受信し画像に再生する画像再生装置のこと。また、テレビジョンを略してテレビと呼ぶ。録画、生放送はあるが、大抵の場合未来の画像は受信されない。

【第十夜】

天使【てんし】
天からの使い。小間使いじゃねーか。そのわりに世界各国、歴史を通じてさまざまな問題を起こしたり解決したり、忙しいことこの上ない。幸せをもたらすと思われがちだが、どうだかねぇ。ちなみにピーター・フォークは天使と会話ができる。

【第二十夜】

TOILET【といれっと】
化粧室、手洗い所、便所などの意。人生のすべてを流すところ。中高生は、学校をサボる際の着替えルームとしても活用。吸った煙草もヤバい薬も、つかまる前に流せばいいのである!?

【第十四夜】

TRUTH【とぅるーす】
ミラーマンの本体、鏡枠上部に記された言葉。真理、真実、事実などを表す。「X-ファイル」のオープニング(第2シーズンより)に、"Truth of out There"(真実は外にあり)というキーワードが登場することは、あまりにも有名。

【第十七夜】

時計【とけい】
元々は「土圭」と書き「時計」は当て字。時刻を示す、あるいは時間を測定する機器。過去には日時計、水時計、砂時計、火時計など。発展して現在では水晶発振式時計、原子時計なども。

英 ウォッチ(Watch)、クロック(Clock)

【第十三夜】

トランペット【とらんぺっと】
金管楽器の一種。ラッパにバルブまたはピストンを取り付けたもの。気勢を上げるため、また闘いが始まることを知らせるために用いられることもある。戦時中には、好戦心を盛り上げる目的から、大きな部隊には必ずトランペット吹きがいた。

【第十五夜】

鉈【なた】
幅が広く厚い刃物。現在、都会では実物を見ることすらないが、薪割り、枝をはらうのに便利。横溝正史、江戸川乱歩などの作品では殺人用具としてよく用いられる。鉈が登場する殺人事件は、なぜか貧乏臭く因縁めいているのが特徴。

【第七夜】

人形【にんぎょう】
人の形に似せて作られたもの。なぐさめの道具として女子供が愛用する。大人の男が愛用することも……。あまり大事にすると、恨まれそうでなかなか捨てられない。風水的には部屋に人形を置くことは運を吸い取られるため、好ましくない。

【第四夜】

ネコの絵【ねこのえ】
主人公の泊まる205号室に飾られた絵。ネコゾンビのありし日の姿を描いたものか? と思いきや、実はイワタナオミ氏の友人の絵ということだ。というわけで本当に実在する。

【第三夜】

ネズミ【ねずみ】
グレゴリーはネズミである。ネズミはずるがしこい印象を抱かせる。このほか、出っ歯、セコイ、ちまちましている、逃げ足が速いなどのイメージもある。鼠色というのも、爽やかとはほど遠い。

【第一夜】

ネックレス【ねっくれす】
グレゴリーママのネックレスは、どう見ても歯でできているっぽい。手に入れた魂の分だけ、ネックレスが重くなる。おしゃれというより、権力誇示の道具として活用しているようだ。ちなみにアクセントのペンダントヘッドは、ネズミ型の骨。

【第十九夜】

ハート【はーと】
"心"あるいは、自分の胸にあるとされている"気持ち"のこと。辛いことがあると、硝子が割れるように砕けることもあるが、鍛え方によっては、しなやかで弾力ある打たれ強いものにも変化する。

【第十八夜】

ハニワ【はにわ】

古墳の外部に並べられた素焼きの土製品。一見個性がないように見えて、……やっぱり個性がない。若い男子の間では、ブスとはいわないが、輝きのない、あまり仲よくしたいと思えない女性をハニワと呼ぶことがある。

【第二十五夜】

母親【ははおや】

人生の中で最初に出会う生命体。母親に愛されないのも愛されすぎるのも人格形成に問題が生じる。母と子供の関係は、必ず他の人間関係にも影響してくるので、人生を上手く生きようと思ったら、まず母子関係を再考すべき。

【第十九夜】

パラシュート【ぱらしゅーと】

グレゴリーの秘密グッズの一種。魔がさしてビルから飛び降りてしまった時などにも役に立つ。グレゴリーは世を悟って腐りきってるだけあって、どんな危険にも対処できるよう、さまざまな秘密グッズを身に付けているらしい。

【第十六夜】

ハンガー【はんがー】

洋服掛け以外に、吊るす＝縛り首の意味もある。腹減ったのハンガー（Hunger：ハンガーストライキのハンガー）もあり。部屋の洋服ダンスから現れたグレゴリーの頭にもハンガーがゆらゆら。ハンガーを引っ掛けるには四角い頭が好都合。

【第二夜】

氷のう【ひょうのう】

中に氷や水を入れて患部を冷やすのに用いる袋。「ア○スノン」や「ひ○ぴた」などを使う現代では、あまりお目にかからない道具。グレゴリーは冷静さを取り戻したい時にも、頭に氷のうを乗せて、頭を冷やすらしい。

【第七夜】

FALSE【ふぇるす】

ミラーマンの本体、鏡枠上部に記された言葉。狂っている、人を惑わすことを意味する。確かに鏡には人を狂わせ惑わす力がある。

【第十七夜】

FUTURE【ふゅーちゃー】

ミラーマンの本体、鏡枠下部に記された言葉。未来、将来などの意味のほかに、先物取引の意味もある。希望に満ちた言葉だが、現実には「介護保険はどうなるのか」「年金はもらえるのか」など、考えると暗いことばかり。

【第十七夜】

PRESENT【ぷれぜんと】

ミラーマンの本体、鏡枠左側に記された言葉。贈り物をすること。あるいは贈り物そのもの。ほかに現在、当面などという意味もある。

【第十七夜】

HEAVEN【へぶん】

ミラーマンの本体、鏡枠右側に記された言葉。神、天使などがいる清浄で安楽な天上の理想の世界。極楽、最高に幸せなどの意味もある。

【第十七夜】

HEAVEN OR HELL?【へぶんおあへる？】

スピードマウス号に乗る時の合言葉。毎日「HEAVEN OR HELL？」な気分で生きてりゃ、張りのある人生がおくれるってもんだ。「♪運が、悪けりゃ、死ぬだけさ、死ぬだ〜け〜さ〜♪」なかなか、そうは割り切れないのが現代社会……。

【第十六夜】

墓地【ぼち】

死者を葬るところ。日本では火葬が主だが、国によっては土葬、鳥に遺体を啄ばませる鳥葬なども行われていた。墓標の形態も地方や時代によってさまざまあり、死んでなお、自己主張することも可能。

【第二十一夜】

ミイラ【みいら】

腐敗せずに原形を保っている死体を指す。来世への準備のため、エジプトでは高貴な人の死体はミイラにしていた。ミイラにする時は、鼻の穴から脳みそを取り去るので、来世では脳なし人間ということに……。来世では脳みそはいらないのか。

【第二十一夜】

道【みち】

人生を暗喩する時によく使われるポエトリー用語。人と同じ道を進んでいけばラクかもしれないけれど、やっぱり道は自分で作るもの。って悦に入ってる当人だって、案外メインストリートを歩いていたりするものかもしれない。

【第十六夜】

MIRROR OF TRUTH【みらーおぶとぅるーす】

ミラーマンの本体、背面に記された言葉。真実を忠実に映す鏡である、との自己主張なわけ。本当のことしか言わない、ちょっとキツい口調の「2丁目のママ」みたいなもん。どんなに残酷なことを言われても聞いたほうが身のためか？

【第十七夜】

ライフル【らいふる】

至近距離での殺人目的で使うには案外不都合。台尻で頭をかち割ったり、銃剣が付いているなら刺し殺しも可能なので、TPOに合わせて使い分けるべし。

【第九夜】

ルーレット【るーれっと】

賭博道具の一種。すり鉢状の回転盤に球を投げ入れ、どの目や色に止まるかを賭けて争うもの。一流のディーラーになると好きな目を出せるという。自分の頭がルーレット盤になっているルーレット小僧なら言うに及ばす。

【第十五夜】

蝋燭【ろうそく】

夜の闇に包まれているかのように、ホテル内はいつも暗い。さらに使用されている照明は蝋燭のみ。四六時中、灯された蝋燭は、すぐに溶けてなくなりそうだが、まめに取り替えているのか、特別仕様なのか、炎が絶えることがない。

【第一夜】

牢屋【ろうや】

ネコゾンビの棲む部屋。牢屋風デザインの内装は特別仕様の石造りで、けっこう金はかかっているはず。SMホテルなんかの内装にありがちな、石造り風の壁紙とは違うのである。ネコゾンビ、ある意味とても特別扱いかもしれない。

【第三夜】

WORLD IS YOUR'S【わーるどいずゆあーず】

クロックマスターのキャッチコピー。おでこに書かれた言葉。「天上天下唯我独尊」そう自分で言う分にはいいが、人から「世界は君のものだよ」と言われたら、宗教ですか？ って感じ。時間を思い通りに操れるなら、世界は手に入ったも同然？

【第十三夜】

ワイン【わいん】

ガウン姿でワインの香りを楽しむ……それはキザで金持ちのイメージ!? ホテルの近所に住む干からびた死体は、ワイン片手にアーバンな夜を楽しんでいる。生身の体が手に入るなら、酒が焼酎に代わっても構わない、と毎晩空想。

【第二十一夜】

CGアニメーション「グレゴリーホラーショー」はイワタナオミ氏を代表とするミルキーカートゥーンによって制作された。

イワタ氏はフリーのイラストレーターなどを経験した後、ミルキーカートゥーンを設立。彼らの手による作品、フジテレビの子供番組ポンキッキーズで放映された「ペコラ」が注目を集め、テレビ朝日、深夜放映の「グレゴリーホラーショー」ではダークコメディテイストで、その表現の幅広さを証明した。

現在では国内だけでなく、国外でも活動を始めたミルキーカートゥーンとイワタナオミ氏に、メールインタビュー、アンケートなどでお話を伺った。

GREGORY HORROR SHOW

——1stシリーズ スタッフパーソナリティー——



メールインタビュー

やりきれなさの行き着く先 イワタナオミ

聞き手・編集部

多忙な生活を送る「グレゴリーホラーショー」、謎の作者、イワタナオミ氏にメールでインタビューを行った。
質問は編集部が作成し、それをメールで送信。イワタ氏にはマイペースに返答してもらった。質問と返答が前後するのはそういった事情である。
また、編集部からの質問、あるいはイワタ氏からの返答、それぞれ分かりにくかった部分に関しては両者で電話などで確認し合って補足した場合もある。

編集部→イワタナオミ
質問のメール1

メールで失礼いたします。
今回はメールでのやり取りを快諾していただいて大変喜んでおります。イワタさんが御多忙ということで、メールでのインタビューというアイディアを思いつきました。お時間のあいた時にでもマイペースに答えていただければと考えています。うまく伝わらない部分もあるかもしれませんが、どうかよろしくお願いいたします。
それでは、さっそく質問です。
グレゴリーホラーショーは5分もの(正確な放映時間は2分30秒)ですが、これは故意でしょうか? また故意でないなら、なぜそのような形態をとられたのでしょうか?
1週間に1度、それもたったの5分という放送時間では、作品に込めたメッセージが視聴者に伝わりにくいのではないでしょうか? それともメッセージなどは初めからないのでしょうか?

あと、ちょっとしたことなのですが、最初にグレゴリーハウスを訪れたのはイワタさん本人ではないか? という仮説を最終話を観て思いついたのですが、いかがでしょうか?

イワタナオミ→編集部
Re：質問のメール1

5分間の番組で、作品の時間を2分30秒にしたのには特別な意味があったわけではありません。どちらかといえば、用意された時間がそれだけだったというのが理由です。
確かに1週間に1度の番組で放映時間が極端に短いため、メッセージが伝わりにくい部分はあったかもしれません。それでも伝わる人には伝わったのではないか、と思っています。
実際、僕のところにも「なぜこんな作品を作るのか?」という抗議もありました。でも抗議をしてきた人というのは、いちばん熱心に番組を観てくれた人です。全話をビデオで録画もされていたそうです。たぶんそれが共感してもらえた証拠でしょう。
メッセージというよりは、その嫌な感じ、または後味の悪さが大切だと思っています。

グレゴリーハウスには訪れています。僕がいちばん最初ではないかもしれませんが、間違いなく訪れています。

編集部→イワタナオミ
質問のメール2

グレゴリーホラーショーはイワタさんの作品ですが、実際にはたくさんのスタッフと一緒にアニメーションを作っているわけですよね。そこにはギャップというか、ジレンマというようなものはないのでしょうか？

1stシリーズの後半は怒濤の展開でしたが、作品を作る際には先々のストーリーまで考えておくほうですか？

イワタナオミ→編集部
Re：質問のメール2

ジレンマに関しては、スタッフと一緒に制作を始めた頃にはあったような気もしますが、すぐにそんなことはなくなりました。僕自身がそれを許容できるタイプだったようです。細かなことをするのが好きではないので、作品の根底さえしっかり押さえてしまえば、後はそれを理解してもらって、各自作業をしてもらうほうが好きです。

グレゴリーホラーショーの場合なら、シナリオを分かっているのか？ ポイントはどこなのか？ ひとつのコンテンツとしてキチンと理解しているのかどうか？ そんなことをスタッフには指示しています。「コンピュータグラフィックスを見せる」という方向に行ってしまうと意味がないので、そこには注意しています。

シリーズのこと、シーンのこと、雰囲気、ストーリー、世界観などなど、そういったものすべてを含めて僕はコンテンツと呼びます。それを理解しているのかということが僕にとっては大切で、上がってくるものに関しては、そのポイントが外れていなければOKです。

ストーリーについては、先のことはまったく分かっていません。追いかけられるように、その場その場でシナリオを書いています。

もちろんシナリオを書くのは得意ではないので、できれば他の人に書いてもらいたいところですが、やりたいことを言葉で伝えることが難しいため、今もひとりで書いています。他の人に頼むと特異性みたいなものが出てこなくて、おもしろくないんです。

編集部→イワタナオミ
質問のメール3

この前のお答えで、イワタさんはグレゴリーハウスに訪れているとのことでしたが、それはいつ頃のことですか？ また、その時に何があったんでしょうか？

イワタナオミ→編集部
Re：質問のメール3

厳しい質問です。

何があったのか？ 「それは謎です」と言って逃げたいところですが、簡単にお答えします。

僕が仕事で「逃げたいけど逃げられない」というような辛い時期に、逃げ込む世界が必要だったんですね。本当にグレゴリーホラーショーの世界そのままです。

決めたくないけど決めなきゃならない、「もう誰か決めてくれよ」本当にそう言いたい気分だったんです。それがグレゴリーの世界に行ってきたということです。

編集部→イワタナオミ
質問のメール4

グレゴリーホラーショーはコメディ的なスタイルをとってはいますが、人間の暗い側面をテーマにしていますよね。
イワタさんにとって「語られるべき何か」とは何でしょうか？
あと、これまでにイワタさんが影響を受けてきたものについても教えてください。よろしくお願いします。

あとまたまた、ちょっとしたことなのですが、イワタさんってどんな人なんでしょうか？ すごく仕事がお忙しいようで、仕事人間のようにも思われるんですが、ご自分で〇〇人間と表現するとしたら、どんな言葉を入れますか？

イワタナオミ→編集部
Re：質問のメール4

影響を受けたものといえば、手塚治虫さんと横尾忠則さんのおふたりからは大変に影響を受けています。手塚さんなら初期のものから作品すべて、横尾さんならグラフィックデザインです。
また、子供の頃の原体験としての「港」も僕に影響を与えているかもしれません。
外国船籍の船。どこの国籍だか分からない船員達。そういう港湾です。ボーキサイトの山があって、海水は汚れ、腐敗したような臭いもします。テトラポットには、たまに水死体が上がったりして、仲間で見に行ったりしました。僕は海なら砂浜よりも港が好きです。
もしかすると、昼の港が「ペコラ」なら、夜の港は「グレゴリー」なのかもしれません。
さまざまな人種の人々がいて、それも気取りも何もない世界。船乗りのおじさん達のメチャクチャさ。そんな混乱、カオスが僕に影響を与えたのでしょうか。よくは分かりませんけどね。

テーマというほどのものもないんですが、あえて言うなら「何をしてもやりきれなさは残るんだよ」ということぐらいでしょうか。あまり計画的なテーマというようなものはないです。

どんな人間か？ ということですが、単なる普通の酒飲みですよ。ビールが好きです。

編集部→イワタナオミ
質問のメール5

本来（というのも失礼な書き方ですが）、絵を描くのがイワタさんのお仕事なわけですが、グレゴリーホラーショーのシナリオを書くのは楽しい作業ですか？
というのは絵を描くのが仕事の方が、言葉というフィールドで仕事をされるのには結構苦労があるのではないかな？ と思ったからです。

イワタナオミ→編集部
Re：質問のメール5

世の中にはたくさんの絵描きというものがいます。その大抵の人達が一枚の絵に思いを込めるわけですが、僕の場合は昔から一枚に思いを込めるというタイプではありませんでした。

映画もマンガも小説も好きで、つまり絵を描く時にも、僕の意識の中にはストーリーというものが、ずっとあったのでしょう。
シナリオを書くのは苦労もしますし大変な作業ですが、楽しい作業でもあります。

編集部→イワタナオミ
質問のメール6

シナリオを書くのは「苦労もある」と答えられましたが、作品づくりに関して、産みの苦しみが多いほうでしょうか？

イワタナオミ→編集部
Re：質問のメール6

どちらかといえば、苦しむほうでしょう。頭を抱えて考えることも多いですしね。考えないと出てこないんです。ふわっと浮かんでくるなんてことはあまりないです。でも、その苦しみが人に見えてしまうのは嫌なんです。「いやあ、酒飲んでる時に思いついちゃってさ」なんて言っておきながら、実は前日徹夜で考えているタイプです。

編集部→イワタナオミ
最後の質問メール

グレゴリーホラーショーの中でいちばん好きなキャラクターとその理由を教えてください。

イワタナオミ→編集部
Re：最後の質問メール

ネコゾンビです。グレゴリーハウスにあって唯一いわゆる、よいキャラクターですから。彼だけは自我が崩壊していないんですね。あの世界でも自分を隠している。どれだけ虐げられても耐え抜いている。そこがいいですね。シリーズの中でも最初に作ったキャラクターで、ストーリーの要所には大抵、彼が登場することになってます。
ネコゾンビはあの世界に逃げ込んだんですよ。でもそこでも馴染めなかった。それがグレゴリーとネコゾンビの確執なんです。他のキャラクターとグレゴリーにはまったくそのようなものはないんですが……。
あるいはだからネコなのかもしれないですね。ステレオタイプな話ですが。

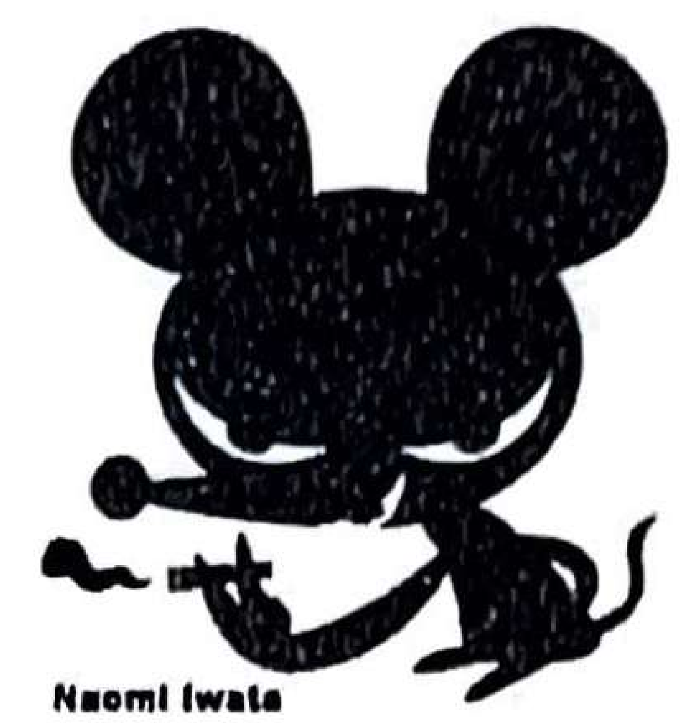
インタビューを終えて……
イワタナオミ氏の言葉は真剣なようでいて、少しかわしているようでもある。インタビューにもあるが、苦労は見せたくないタイプのようだ。本当の心は外に出さない人物なのだろう。
「グレゴリーホラーショー」の世界がイワタ氏によって「作られたもの」ではなく、イワタ氏の作品として「立ち現れてきたもの」だとしたら、やはり、グレゴリーの世界は我々の心の中にもあるのではないか？ 未練や、納得できないこと、やりきれなさが心のわだかまりになった時、目の前にグレゴリーハウスが現れるのだろうか。

ふりがな

氏　名　イワタナオミ

※男・女

印



生年月日　本人に尋ねたところ、不機嫌そうに席を立ってしまいました。　年　月　日生（満　歳）

ふりがな

現住所　〒

明かすと生活に支障がある、と怒鳴られてしまいました。

ふりがな

連絡先　〒　（現住所以外に連絡を希望する場合のみ記入）

恐ろしくて聞けませんでした。　方

年	学歴・職歴
	なんとか聞きだそうとしましたが、本人は、
	「会心の一撃!!」と叫びながら棒を振っている
	ばかり…。
	しかし、窓ぎわで「タマビ…」とつぶやいている
	姿を見かけたことがあります。
	もしかしたら、あの大学のことでしょうか…。
	職歴を尋ねたところ、「オレは船乗りだ!」と言って
	涙ぐんでいました。もう、これ以上私も聞くに耐
	えません。許して下さい。

年	免許・資格
	その話をすると、床に横になり、目を閉じてしまい
	ました。覗きこむと目に涙をうかべて、
	「…そんなの、ほしくないや…」とつぶやいて
	いました。　もう、やめていいですか？
	私もつらくなってきました。

自覚している性格

私が聞くと、「自覚するのはお前だ！」と、ソッポをむかれてしまいました。

特技

「オレは100mを5秒で走れる！」と道路に飛び出し車にひかれそうになっていました

好きなこと

なにやら白目をむいてボソボソつぶやいていたのですが、聞き取れませんでした。

嫌いなこと

「お前だ!!」と言って、私になぐりかかってきました。

子供の頃はどんな子供？

「フツーの子供でちゅ」と答えていました。

ある日の夢（悪夢でも可）

叫びながら走り去ったまま帰って来ません。編集部の皆様、申し訳ありません。もう、そっとしておいて下さい。代筆している私が空しくなってきました。

代筆　イトセナオミ　吉日

制作スタッフへの質問

イワタナオミ氏と共に「グレゴリーホラーショー」を作ってきたスタッフにアンケートを行った。質問に答えてくれたのはミルキーカートゥーンの古くからのスタッフ3人。3人はTVシリーズの最初から制作に関わっている。

イトセさんはイワタナオミ氏の履歴書を代筆してくれた方で、イワタさんとはミルキーカートゥーン立ち上げ以前から、一緒に仕事をされている。
みながわさんは「グレゴリーホラーショー」1st シリーズから2nd シリーズのディレクターを務めた方である。また、44ページからの3DCG映像の作り方もレクチャーしてもらった。

質問

Q1　肩書き

Q2　「グレゴリーホラーショー」制作中の作業

Q3　イワタナオミとは？

Q4　「グレゴリーホラーショー」でいちばん好きなキャラクターは？

Q5　「グレゴリーホラーショー」で自分に似ているキャラクターは？

Q6　あなたにとって「グレゴリーホラーショー」はどんな作品ですか？

イトセナオミ



A1
アートワーク

A2
キャラクターのデザイン作業、シナリオのお手伝い作業…その他もろもろ。
3Dの制作のほうはノータッチです。

A3
ビールがあれば幸せな人…というのも失礼かな。仕事人間といってもピンとこないし。働き者だけど、何も言わないとお酒飲んじゃうし…。
作品への取り組み方は結構ストイックだなーと思ったりします。尊敬してます、ハイ。

A4
カクタスガールかな。田舎くさいとことか自分を見てるようで。
かなりズレてるけどバカじゃないですよね、きっと。少なくとも兄よりはキレ者のはず。

A5
上の回答とだぶっちゃうなあ…。

A6
何が起こるか想像がつかない。入り込みたくない世界だけど、離れたくない作品です。

新倉美穂子



A1
キャラクターのモデリング及びモーションをつける。

A2
コンピューターの前でひたすら……。

A3
ふしぎな人

A4
“ジェームス” なまいきだから。

A5
“ロストドール”

A6
ちょっとこわくて、おもしろいキャラクターが沢山でてくる。

みながわかずみ



A1
ディレクターという肩書きをいただいた雑用係。

A2
PCの前に座ったり、電話したり、話したり、泣いたり、笑ったり……たまにCG。

A3
沢山仕事をかかえて忙しそうな時に話しかけても、嫌な顔しないで話が聞けるのは凄いと思った。あと酒。特にビール。やっぱビール。

A4
キャサリン。吸われたい。

A5
ミイラ親子。いつも身体が悪いような気もするし。

A6
業(カルマ)

コラム

グレゴリーはどこで生まれたのか?

編集部

『グレゴリーホラーショー』はテレビ放映以前に作品として完成、発表されていた。これを知ったのは、恥ずかしながら本書の制作途中である。

イワタナオミ氏は以前、“Computer Graphics World”誌(前“MacWorld”誌)に連載を持っていた。それはキャラクターをペーパークラフトで作る「ドローテクニック」のコーナーであり、連載をしていくうちにグレゴリー達が登場することになる。これが『グレゴリーホラーショー』の始まりとなるわけだ。連載のコーナー名も「Gregory Horror Show」に変わり、テクニックのコーナーからストーリー物へと変わっていった。この連載は1999年1月号まで続くこととなる。



どう見ても形が似てるマックベアー。彼を追ってストーリーが始まることとなる。ほかにウィンドウズベアーなどもあったそうだ



連載当時のMac World誌。コーナータイトルは「ドローテクニック」(ミルキーカートゥーン所蔵資料)

3DCG映像の作り方

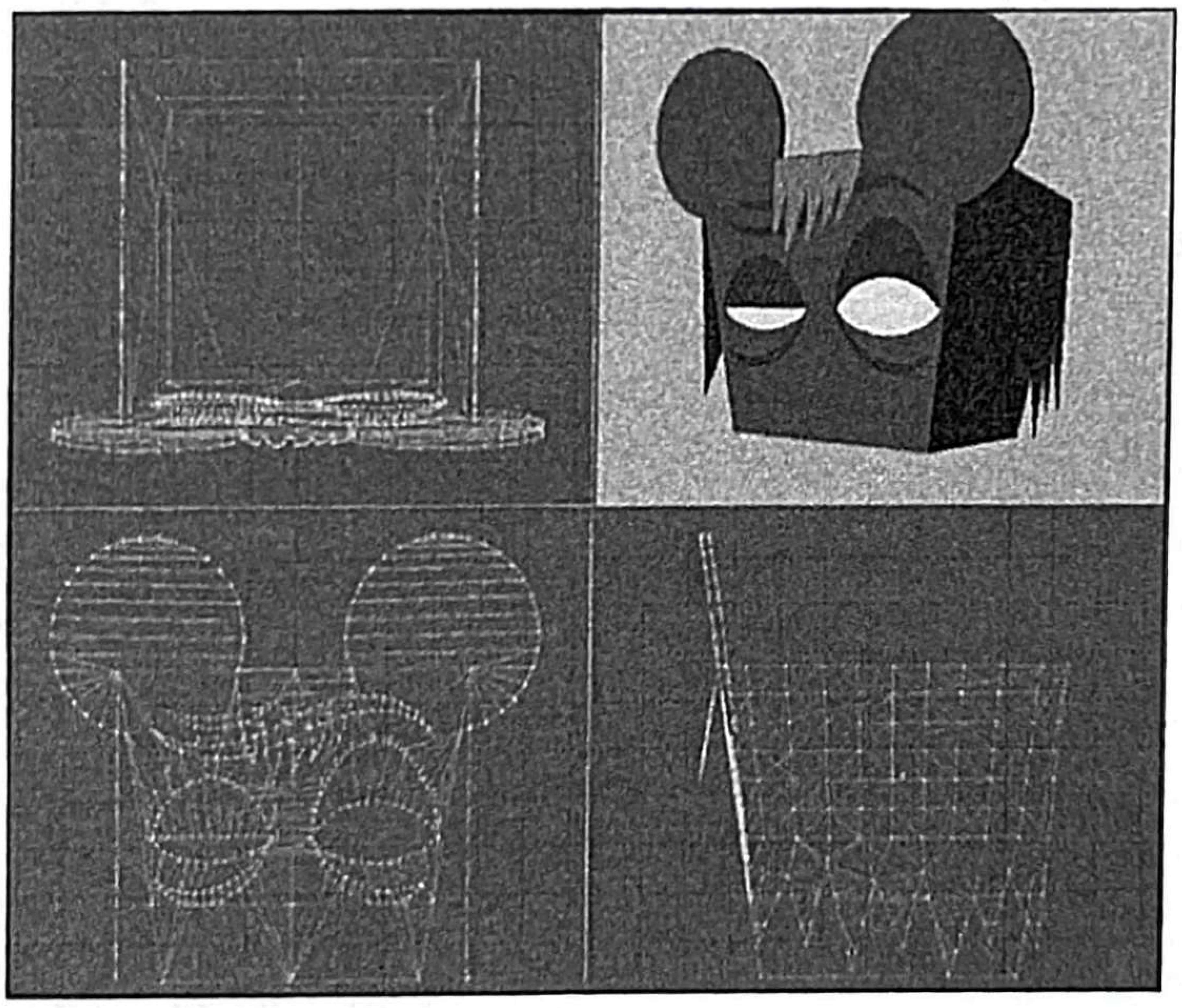
解説　みながわかずみ

「グレゴリーホラーショー」1stシリーズと2ndシリーズのディレクターを務めたミルキーカートゥーンのみながわ氏に「グレゴリーホラーショー」のCG制作現場でお話を伺った。聞き手は100％まったくの素人で、「どのようにしてグレゴリーの映像ができ上がっていくのか？」ということを中心に質問した。

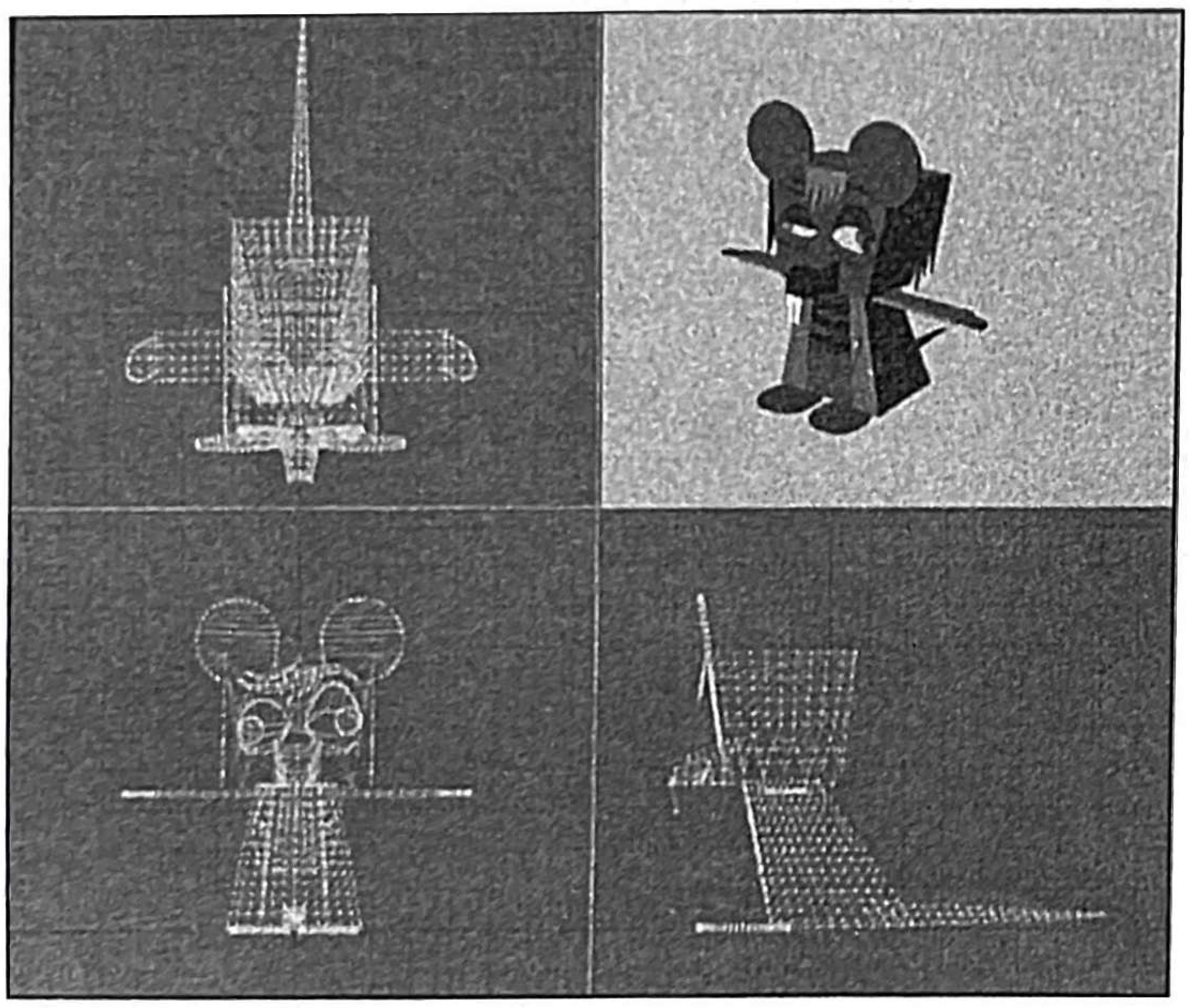
また、例として本書の表紙・裏表紙も作っていただいた。ラフスケッチも掲載したので、その素晴らしい仕上がりと見比べてほしい。

キャラクター

！ グレゴリー本編は15フレーム／1秒で作る。正味2分の映像でも1800枚以上の画が必要となる！



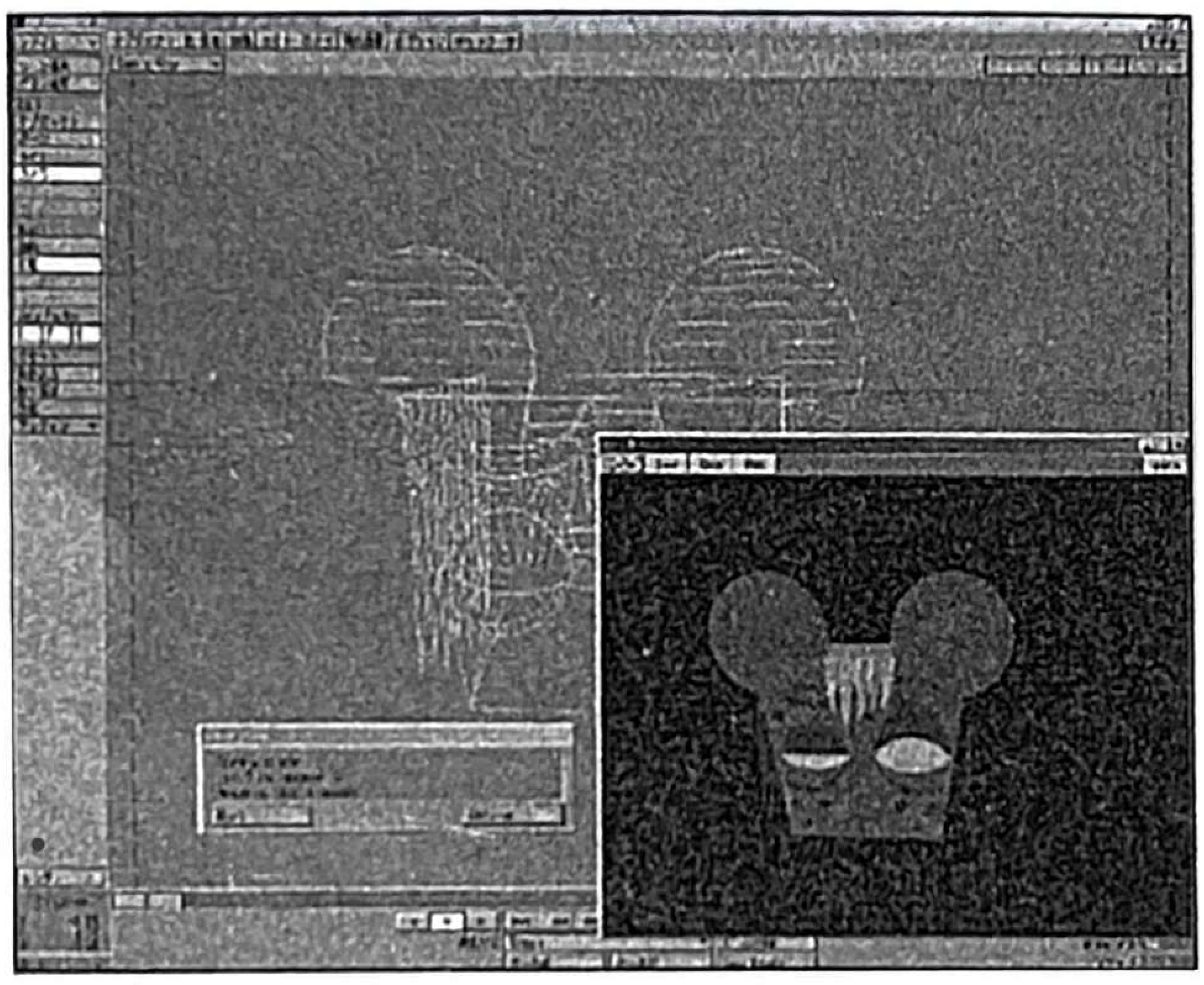
例となるキャラクターはもちろんグレゴリーその人。CG映像を作っていく際に基礎となるモデル（立体）データは頭と体など別々のデータとして、3Dソフト上に保存されている。上・下・側面のいわば3面図のデータがモデルデータだ。



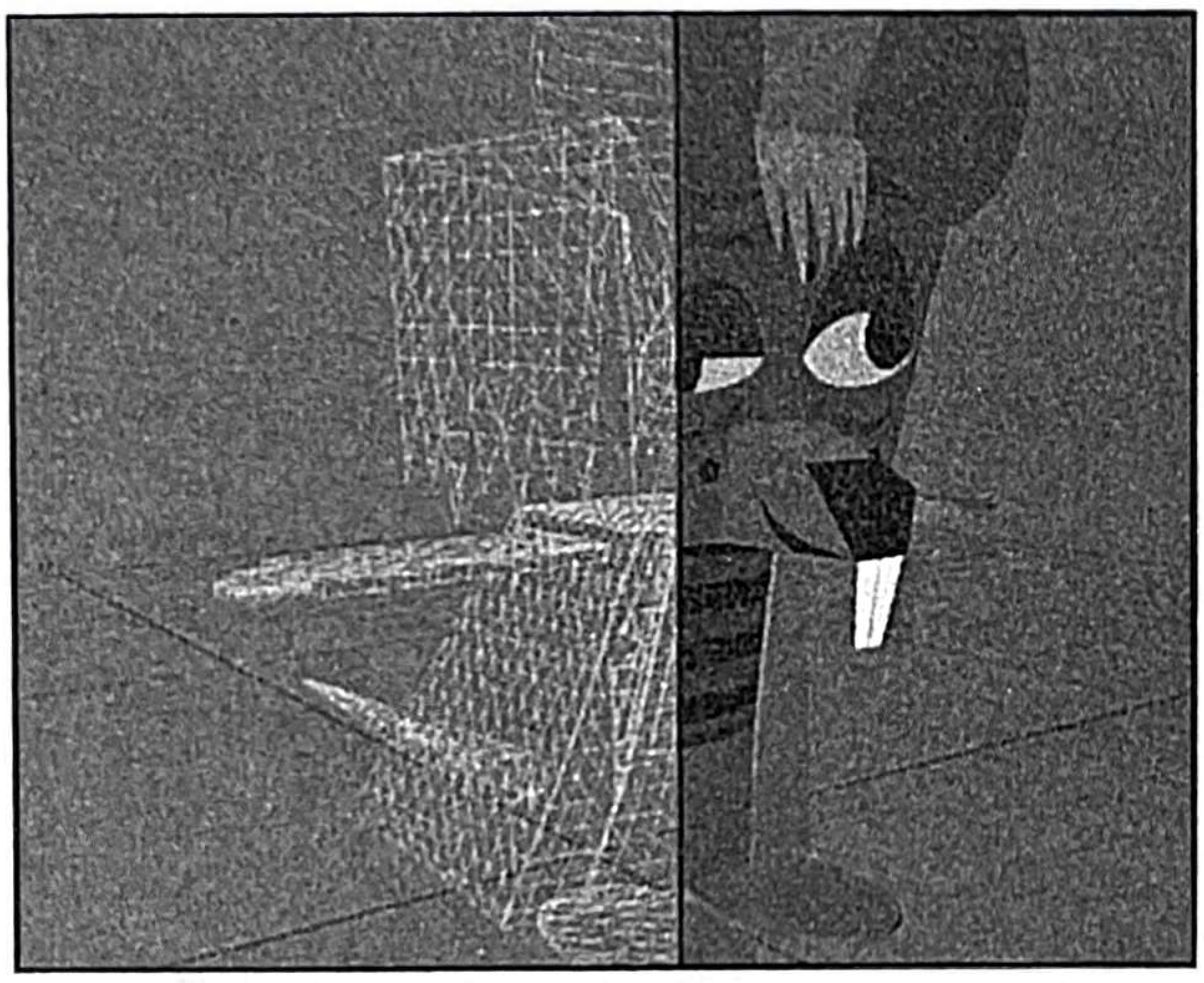
1stシリーズと2ndシリーズで使用されている3Dソフトは「LightWave3D」のVer5.6。頭や体などのデータを組み合わせて全身データを作っている。

! 保存されているモデルデータは頭、眼×2、口(鼻)、手×2、脚×2などで、1キャラクターで10パーツ程度となる。

モデルデータの用意ができたところで、それを必要な角度から撮影する。これをレンダリングという。右の写真は制作状況を確認するための仮レンダリング状態。もちろんこの後で鼻が付く。

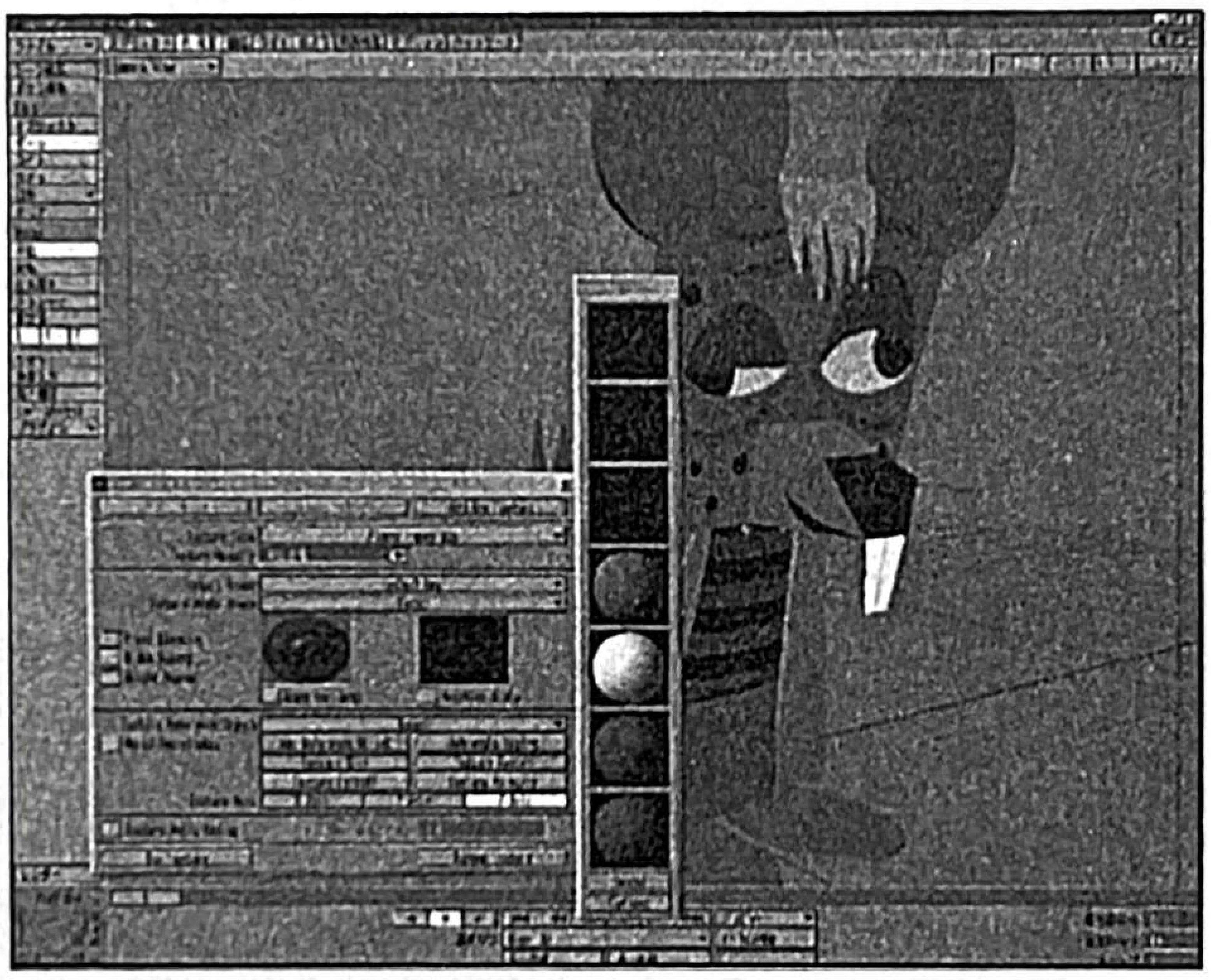


別々のデータだった頭と体をくっつける。画を動かす時には、頭と体が別々のデータでも「ペアレント」(親子付け)というシステムで離ればなれになってしまうことはない。写真はワイヤーフレームと仮レンダリングの画像の合成。

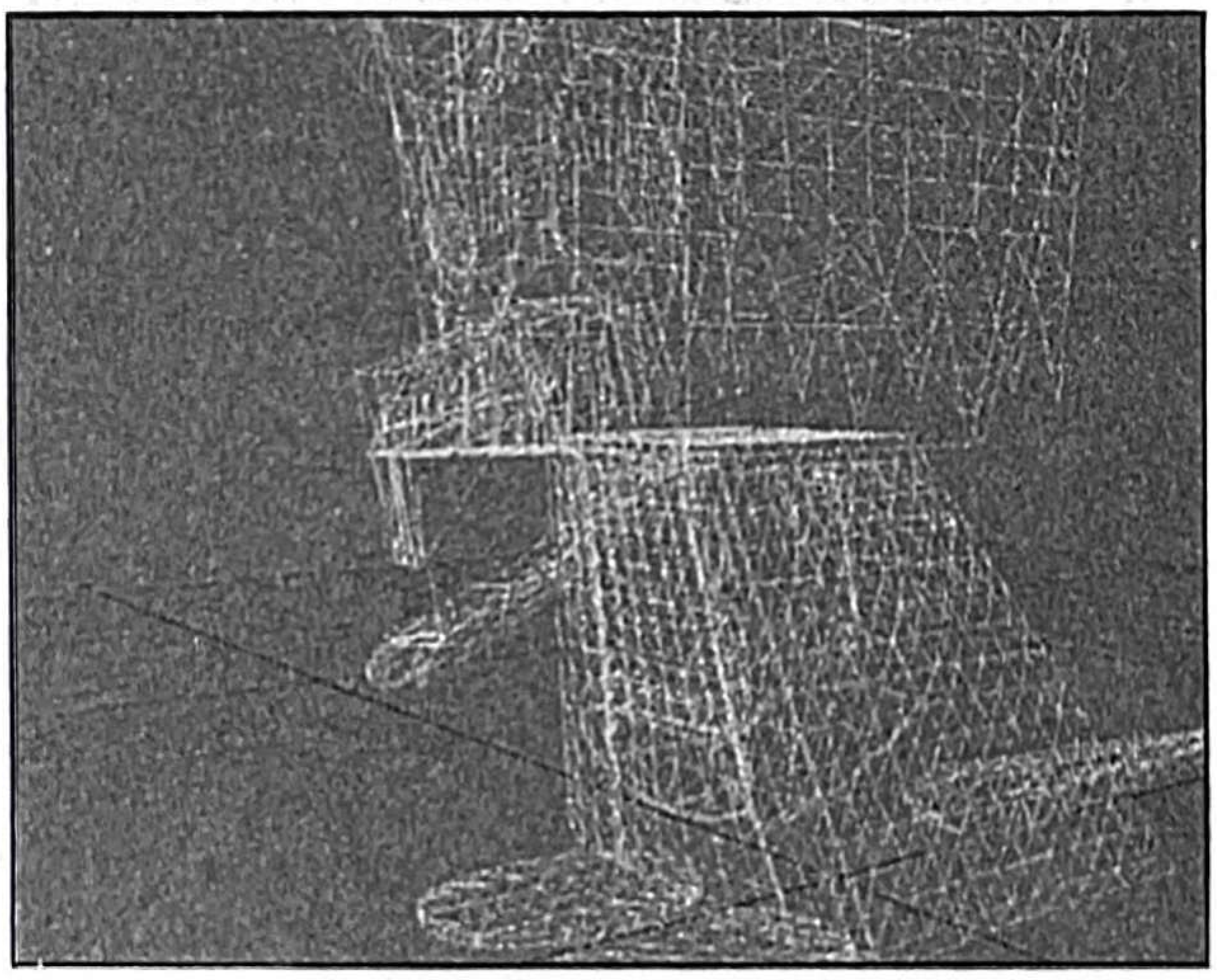


動くものはそれぞれ別のデータで作られていることが多い。眼もそのひとつでさまざまなテクスチャーが用意されている。下の写真はグレゴリーの眼。



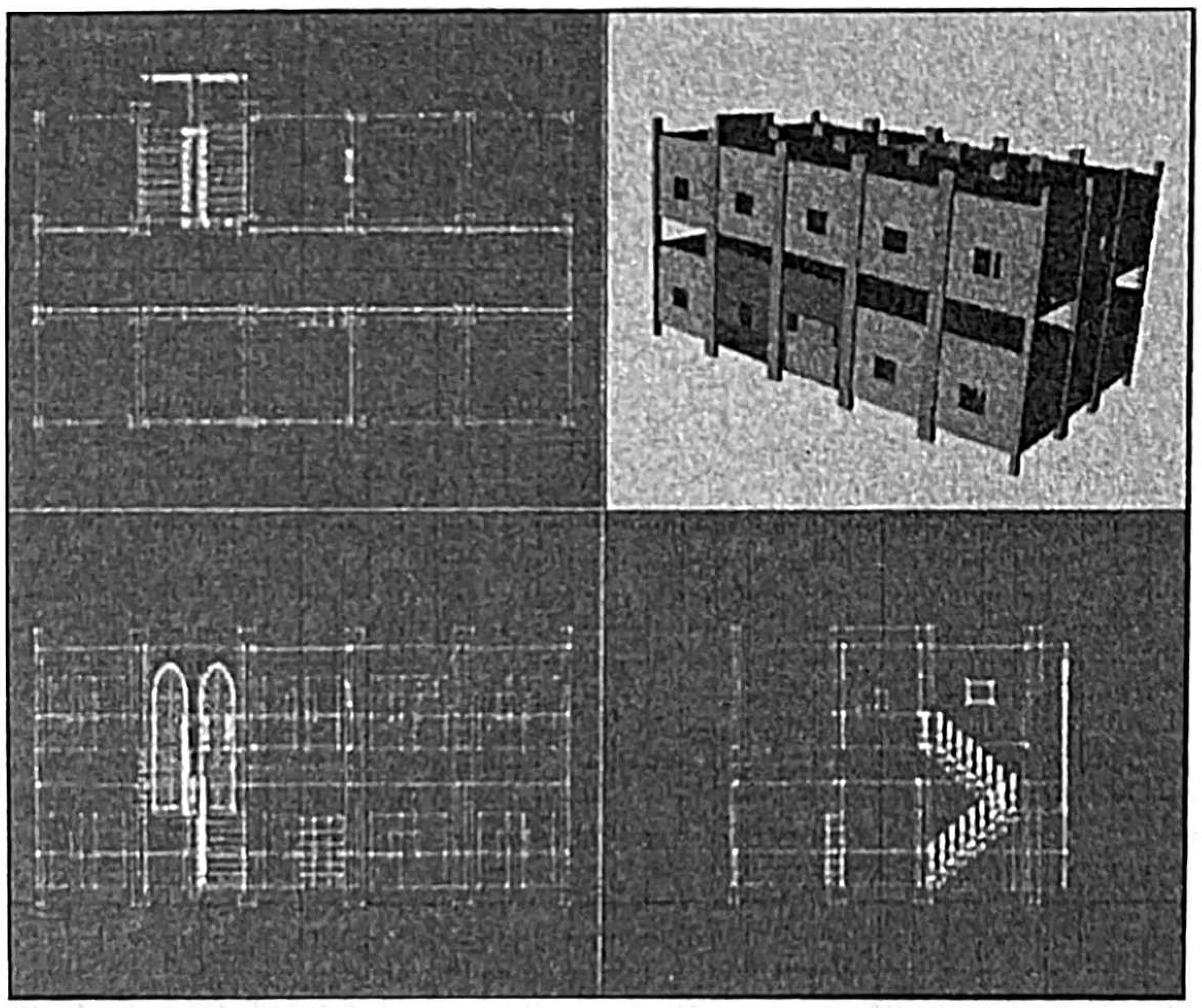


モデルデータにはキャラクターに動きをつけるための関節が付いており、これを利用して演技をさせる。ただし、これは単なるデータなので、曲がるわけがない方向にも曲がってしまうため、演技をさせるオペレーターはそれに注意しなければならない。もちろんグレゴリーの鼻(口)にも関節が入っている。

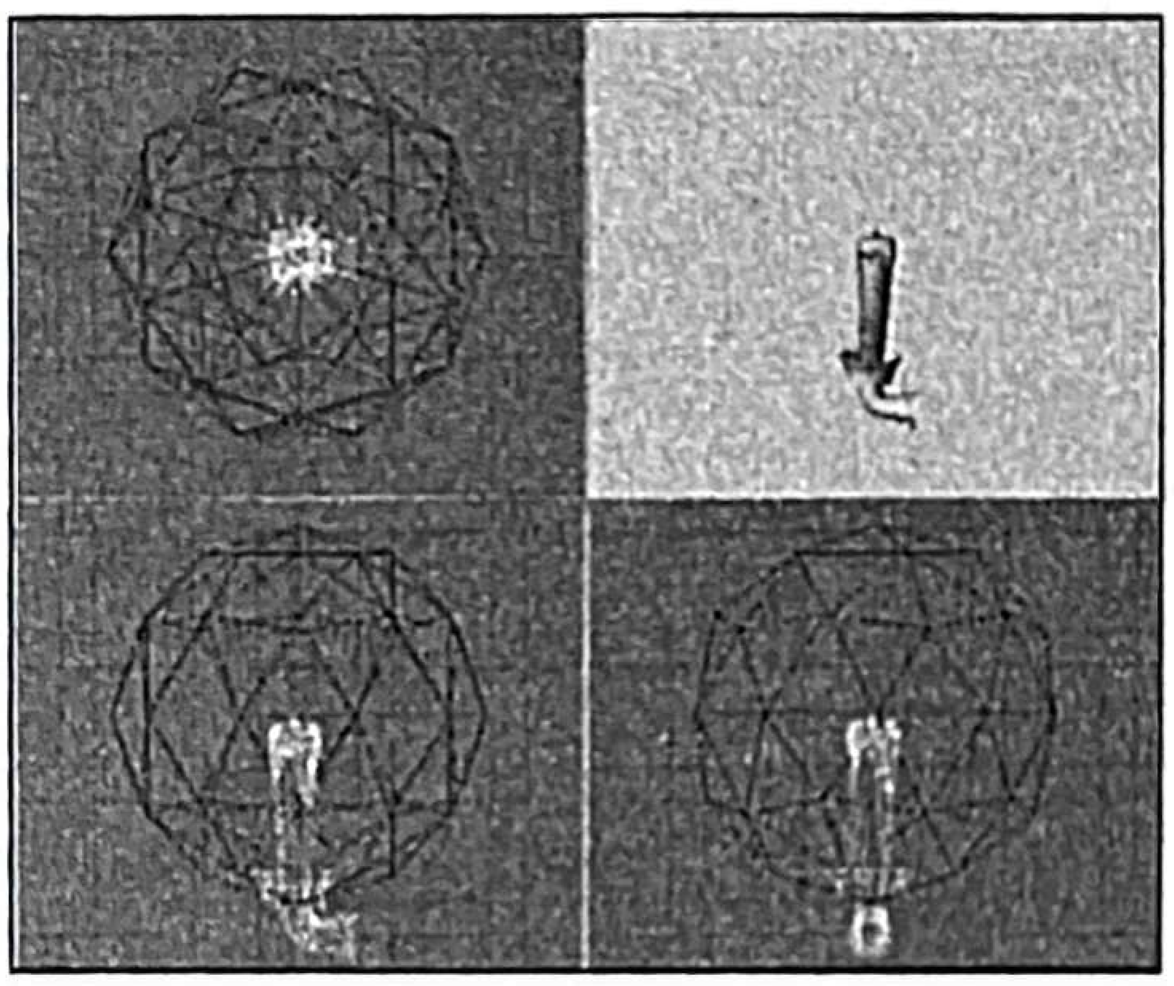


背 景

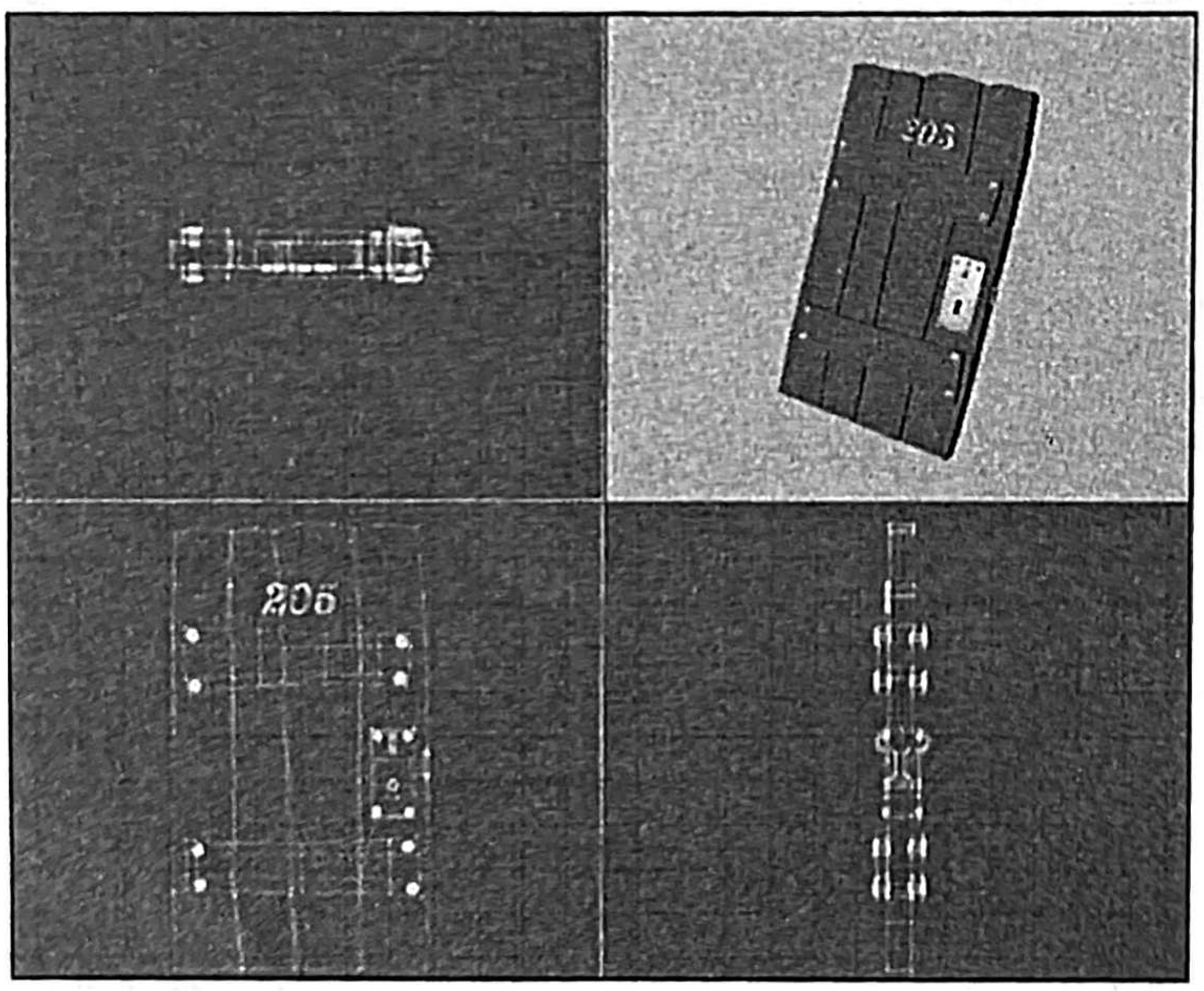
! グレゴリー本編では、1枚の画のレンダリング時間は10分程度で終えられるようにデータを作成している。



キャラクターのみならず、背景も含めて、大抵の部分はモデルデータが作られている。写真はグレゴリーハウスの立体データ。この中でキャラクター達に演技をさせ、必要な壁、ドア、床、などを一緒にレンダリングすると、我々の見ているグレゴリーホラーショーの1／15秒となる。



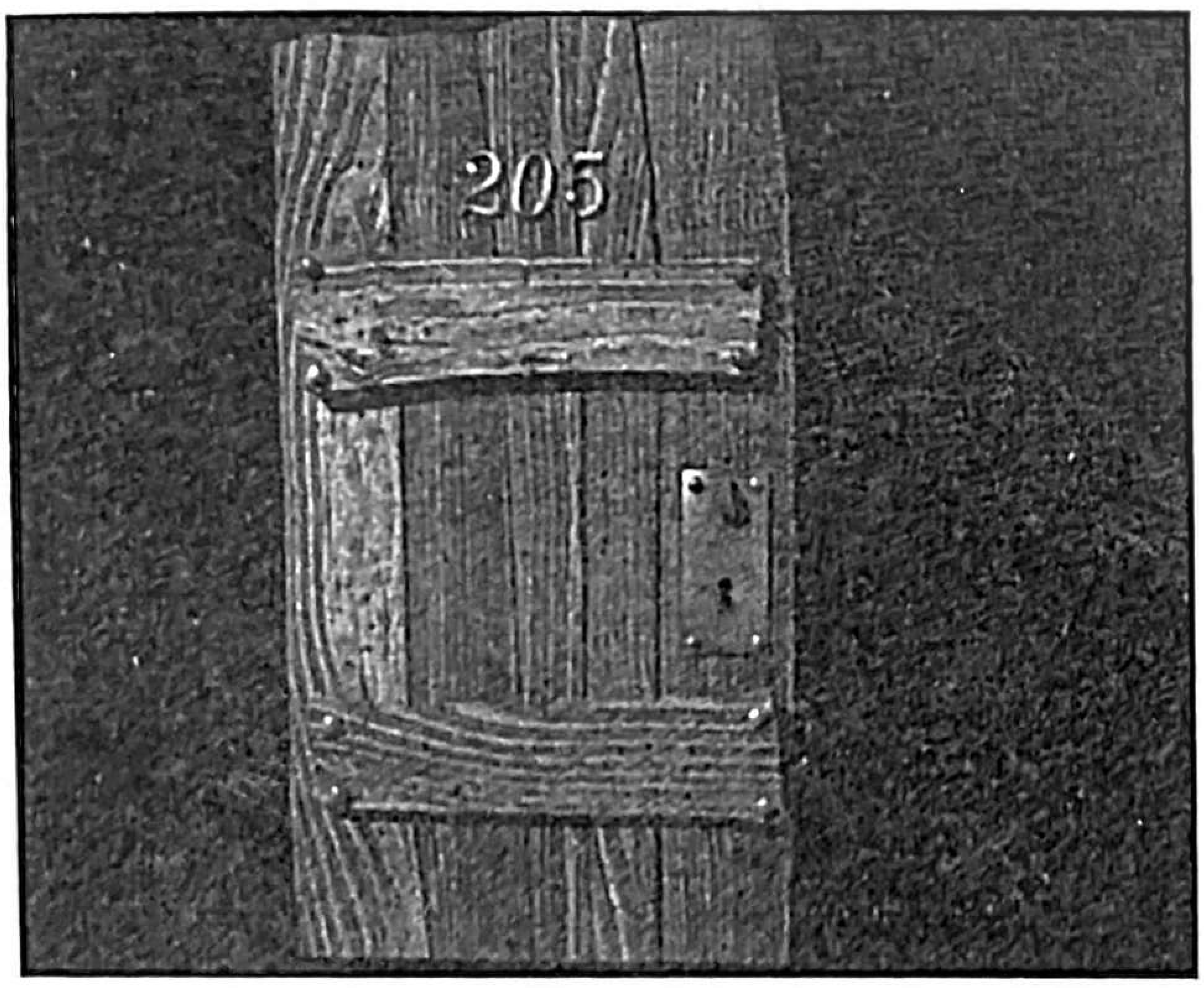
蝋燭の光にもモデルデータはある。



ドアのデータ。グレゴリーハウスの中にあるたくさんのドアはこのデータから、コピーされ調整される。ドアノブや、部屋のナンバープレートは後から取りつければいいわけだ。

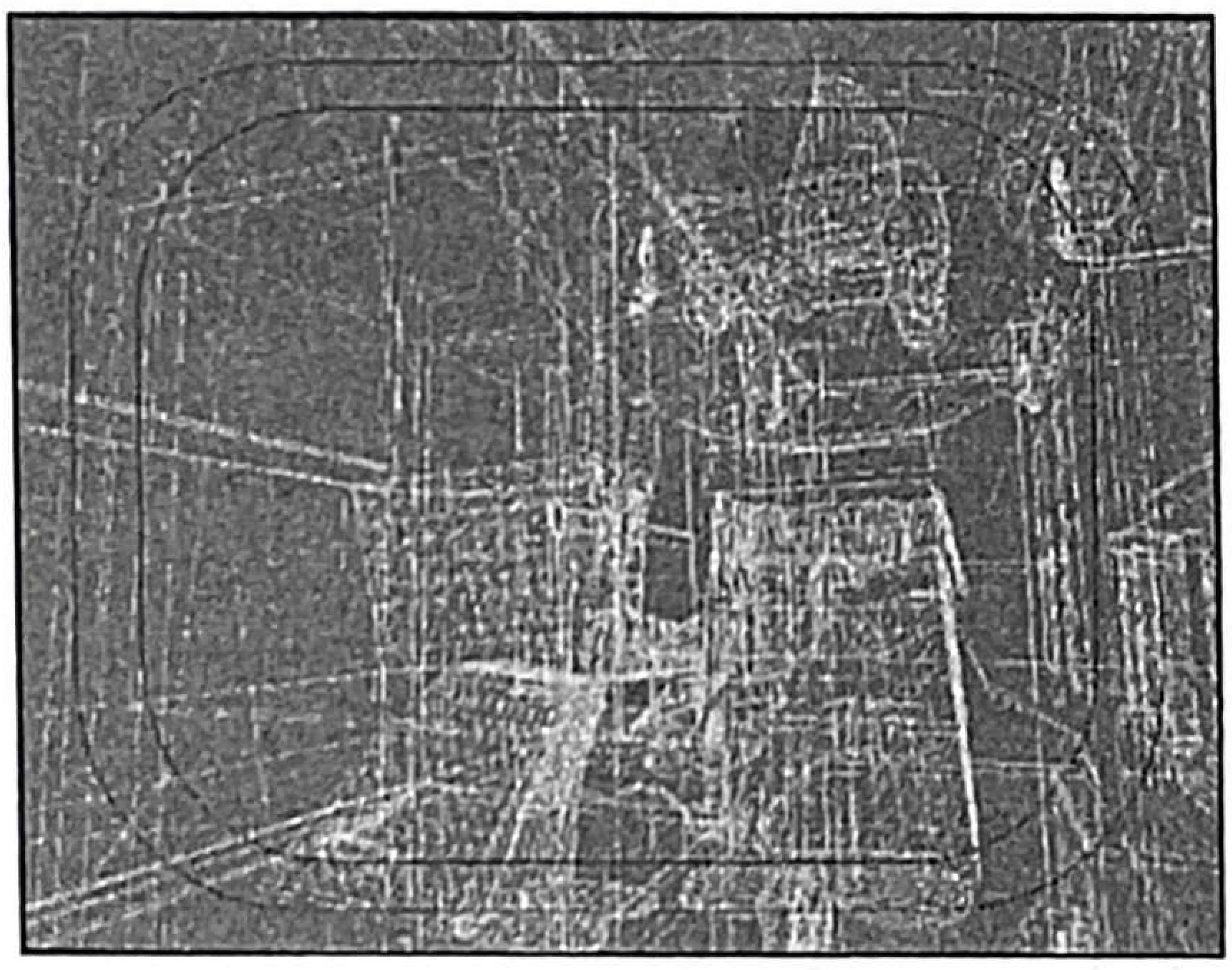


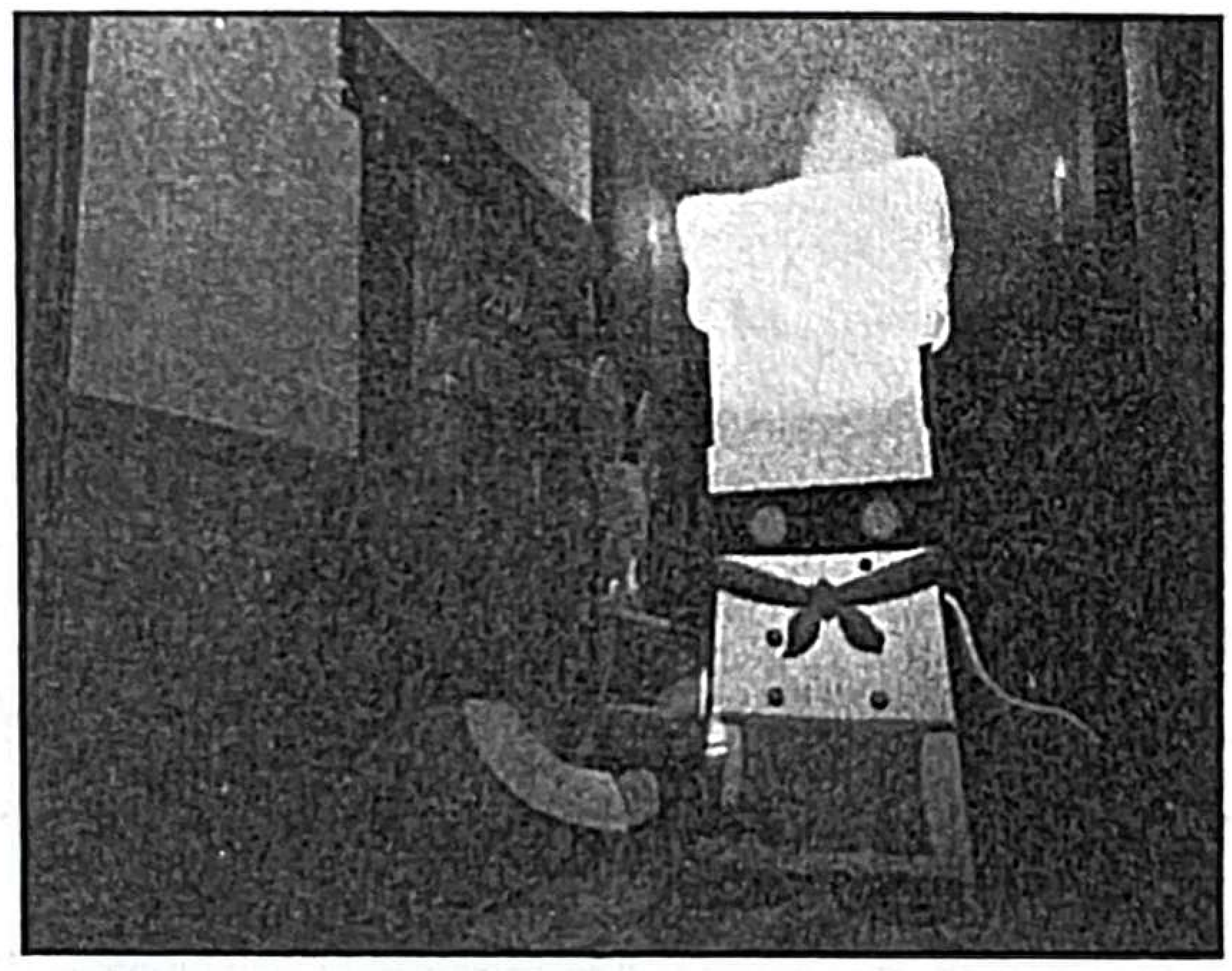
ドアのテクスチャー。モデルデータとは別に物体の表面に貼り付ける絵。これをドアの立体データに貼り付けた後にレンダリングする。



こうして仕上がったドア。これがグレゴリーハウスのモデルデータ内に配置される。さらにキャラクター、パーツなど必要なものすべてが配置されて、やっとレンダリングに至る。

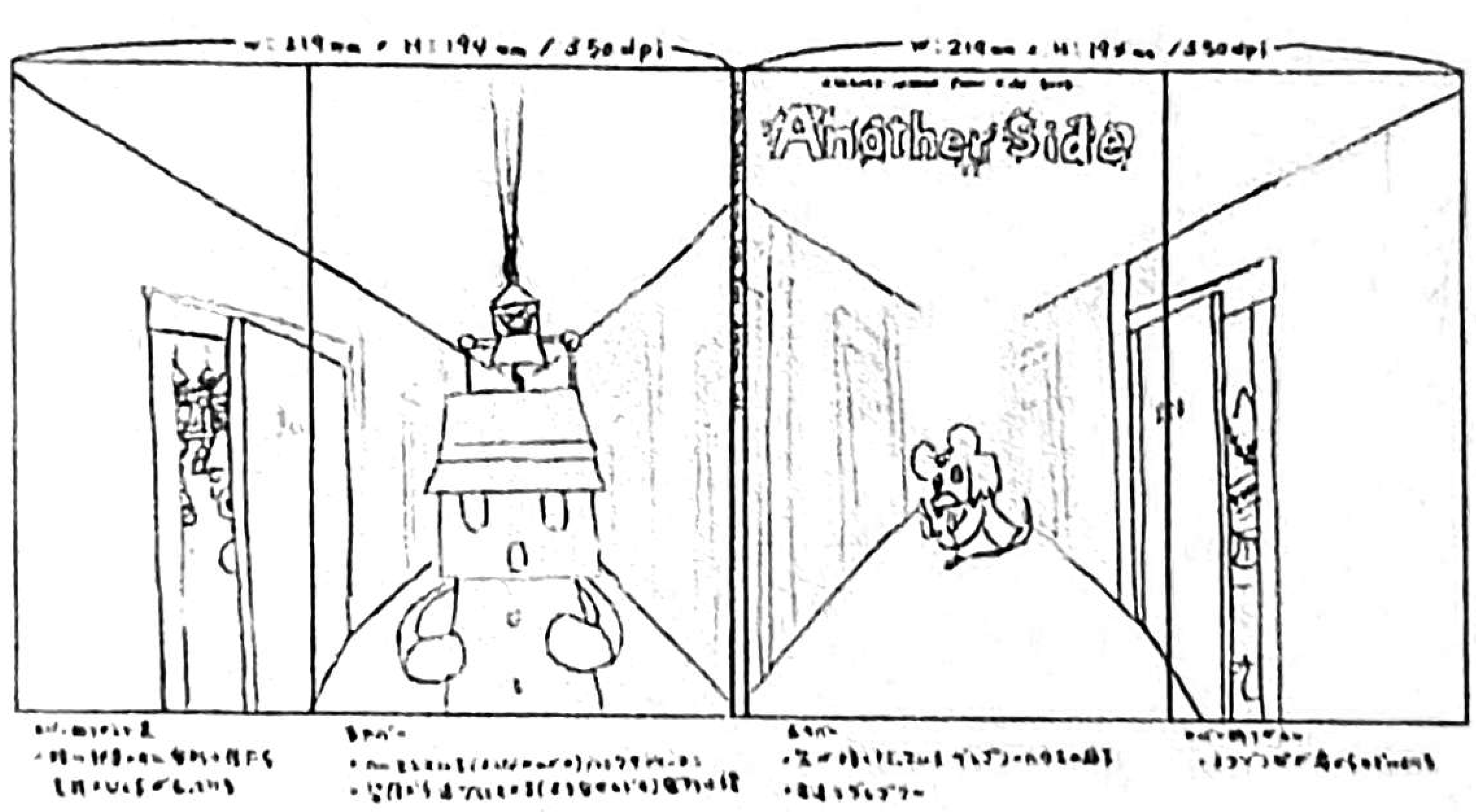
画面作り→レンダリング

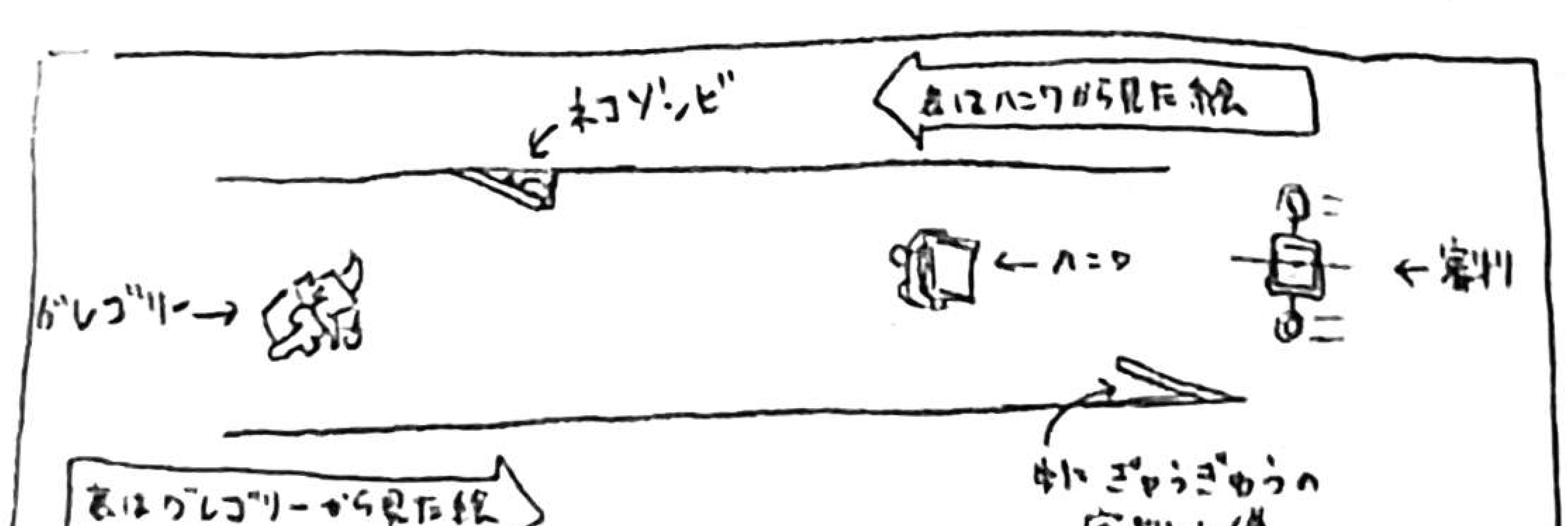




廊下では地獄のシェフとグレゴリーが密談。カメラワークを決めてからレンダリングすると、やっと1/15秒が完成する。3DCG映像はこのような大変な努力があって作られていく。

例：カバーグラフィック





本誌表紙はこのコーナーの解説をしていただいたみながわさんの制作によるもの。左はアイディアラフスケッチ。みながわさんはこれを見て「モデルデータを、下の図の通りに配置した後、2つの視点で別々にレンダリングします。ライティングを凝ったほうがいいですから」と制作にかかった。素晴らしい仕上がりはもう一度、表紙で!

!
停電はCGアニメーション制作の大敵!「東京電力に助けられている」とは、みながわさんのお言葉。

謝辞
本書の制作にあたり、御協力いただいたミルキーカートゥーンの皆様、特に無茶なお願いの数々を快く聞き入れてくださったイワタナオミさん、イトセナオミさん、みながわかずみさん、増田孝さんに感謝いたします。
また、ここでは特に名前を出しませんが、さまざまな形で助力いただいた方々にこの場を借りて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。(制作スタッフ一同)

STAFF

編集／堀秀郎（山猫有限会社）
構成・本文／堀秀郎（山猫有限会社）、茂木直美
本文デザイン／藤田まゆ美（山猫有限会社）

カバーデザイン／藤田まゆ美（山猫有限会社）
カバーCG／みながわかずみ（ミルキーカートゥーン）

協力／株式会社　ミルキーカートゥーン

Special Thanks／
NECインターチャネル株式会社　http://www.neic.co.jp（ミュージックメディアグループ　☎03-5440-0756）
株式会社　キューブ　（☎03-3234-3721）
株式会社　講談社 ヤングマガジンアッパーズ編集部　http://www.yanmaga.kodansha.co.jp
株式会社　ユージン　http://www.yujin-net.com（☎03-3696-6004）
株式会社　ユニファイブ　http://www.unifive.co.jp（ユニファイブお客様相談センター　☎0471-43-3621）

担当編集／麻生三矢子

ケイブンシャの大百科別冊
GREGORY HORROR SHOW Guide Book　ANOTHER SIDE
グレゴリーホラーショー　ガイドブック　アナザーサイド

平成12年12月22日　初版発行

発行人　加納将光
編集人　椎葉克宏
発行所　株式会社　勁文社
〒164-0012　東京都中野区本町3丁目32番15号
☎03-3372-3281（編集）・☎03-3372-3291（営業）振替00190-8-13311番
製版所　株式会社　東京印書館
印刷所　株式会社　エンタープライズ　フジオー
製本所　明興製本工業株式会社

落丁、乱丁本は、当社にてお取り替えいたします。
定価は表紙に表示してあります。

ISBN4-7669-3640-X　C9476



9784766936407
1929476010001
ISBN4-7669-3640-X
C9476 ¥1000E
定価：本体1000円＋税

雑誌 63557-56